

ともに挑む。ともに実る。

MIZUHO みずほ銀行

2024年6月3日

みずほディーラーズアイ (2024年6月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 149.50 ~ 159.50

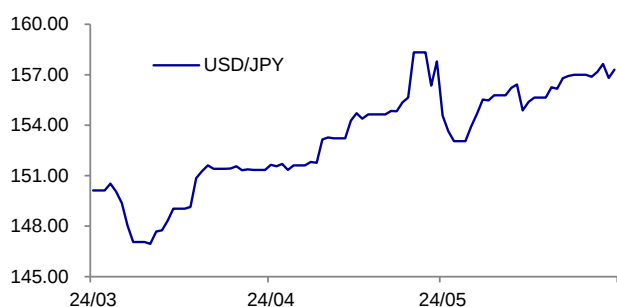
金融市場部 為替営業第二チーム 宮地 崇

■ 先月の為替相場

月初ドル円は157.70レベルでオープン。オープン後、今月の高値となる157.99円まで上昇後、FOMCがハト派と捉えられたことで157円台前半まで下落。その後、2日早朝に本邦通貨当局による介入と見られる動きに、153円台前半まで急落。一旦、156円台を回復も米金利低下に153円台前半まで再び値を下げた。3日には予想比弱目の米4月雇用統計を材料に今月の安値となる151.86円まで続落も、ボウマンFRB理事のタカ派色の強い発言をうけ、153.00円近辺まで値を戻しクローズ。
本邦休場の6日は、米金利の上昇に154円台前半まで上昇。7日には、植田日銀総裁が岸田首相と面談との報道に値を下げる局面もあったが、カシュカリ・ミネアポリス連銀総裁の「インフレ定着すれば、必要に応じ利上げの可能性も。」との発言に、154円台後半まで上昇。週後半にかけて円独歩安の展開に、一時156.00円手前まで続伸も、米失業保険申請件数が悪化したことで反落。結局、155円台後半で越週。
中旬に入り、155円台後半で取引開始。13日には発表された米4月NY連銀消費者期待インフレ率の一部が加速したことから、156円台前半まで上昇。続いて14日の米4月PPIの予想比上振れもドル円をサポートし156円台後半を付けた。週半ばに注目の米4月CPIの鈍化、予想より弱目の米4月小売売上高・米5月NY連銀製造業景気指数を受け、ドル売りとなりドル円も154円台後半まで反落。16日には、短期勢のストップロスを巻き込み153.60円まで続落。しかし、予想比強い米4月輸入物価指数に反応し155円台半ばまで値を戻した。週末にかけて一旦続伸も155円台後半で取引終了。
第四週目は155円台半ばでスタート。ドル円はマスター・クリーブランド連銀総裁の「年内3回の利下げが適切だとは思わない。」との発言に156円台前半に上昇。21日にはウォラーFRB理事のタカ派発言に156円台ミドルレベルまで続伸も、155円台後半まで反落。しかし、22日のFOMC議事要旨でのタカ派寄りの内容に156円台後半まで値を上げた。23日には米失業保険申請件数や米5月総合PMIが良好な結果となると157円台前半まで上伸。結局、やや小緩み157.00円辺でクローズ。
月末週は、週序盤は欧米市場休場にて156円台後半を小動き。28日に強い米5月消費者信頼感指数を受け底堅い展開に。29日には米金利の上昇にドルが買われ157円台後半まで値を上げた。月末にかけては、弱い米第1QGDP改定値やクロス円の巻き戻しに売りに156円台半ばまで軟化している。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



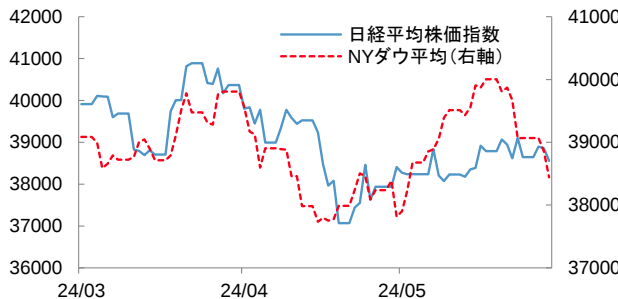
■ 今月の見通し

今月のドル円はこれまでの円安地合い巻き戻しによるドル軟調な展開を予想。

まずドル円の上昇局面では、当局の介入警戒感の熾り上値を抑える要因となろう。実際、当局の介入額も約10兆円程度と昨年の貿易赤字を吸収する水準であり需給構造に影響を与える公算は大きい。また、今回の介入については流動性の薄いタイミングで実施された模様であり、主な買い手と想定される投機筋の円ショートは拡大しているものと考えられる。
その投機筋のポジションであるが、足許、IMM投機筋先物の円ショートは15万枚レベルとなっており、一時はリーマンショック前の水準まで膨れ上がっていた。一方でドル円が急騰した2022年と比較すると、明らかに現在の円ショートポジションが拡大していることが見て取れる。このような状況を踏まえると、今年は貿易赤字に基づいた本邦勢のドル買い円売りが相場を牽引した22年のマーケット環境とは異なり、ドル円上伸のドライバーは投機筋が主体であることが想定され、蓄積したポジションの巻き戻しによる下落リスクには留意したいところ。
さらに、クロス円に目を移すとユーロ円が170円台、ポンド円が200円台に到達しておりマーケットの過熱感は日々高まっている。米国と異なり、欧州各国は利下げに踏み切るタイミングが迫ってきており、クロス円の調整がドル円の急落を招来する展開には要注意か。
尤も、米国のファンダメンタルズについては、長期目線やや鈍化傾向が見られるものの、即座にスタグフレーションに陥るリスクは考えづらい。また、粘性性の高いインフレが米国の利下げ遅延の要因となる環境はしばらく続くものと思われ、こちらはドル円のサポートする材料となろう。
但し、市場は4月下旬をピークにドル安に傾斜している思われ米国の景気鈍化の思惑が強まる局面では、ドル円の上値を抑えるファクターとして機能しそうだ。加えて、日銀関係者の発言はタカ色が強まっており、日銀の動向も円買いを喚起する展開も捨て難い。上記のような様々な材料を踏まえると、今月のドル円は軟調な展開をメインシナリオとしたい。

■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/1	ISM製造業景況指数	4月	50.0	49.2	50.3
5/2	FOMC	-	5.25-5.50	5.25-5.50	5.25-5.50
5/3	非農業部門雇用者数変化	4月	240K	175K	303K
5/3	失業率	4月	3.8%	3.9%	3.8%
5/3	平均時給(前月比)	4月	0.3%	0.2%	0.3%
5/3	ISM非製造業景況指数	4月	52.0	49.4	51.4
5/15	CPI	4月	0.4%	0.3%	0.4%
5/15	CPI(除食品・エネルギー)	4月	0.3%	0.3%	0.4%
5/15	小売売上高	4月	0.4%	0.0%	0.7%

(資料) ブルームバーク

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	11名	160.00 ～ 154.00	ベア	4名	159.25 ～ 150.75	※ レンジは中心値
宮地	ベア	159.50 ～ 149.50	投機筋のIMM円ショートポジションは、相応の規模まで拡大中。クロス円の水準にも過熱感が見られるなか、日銀動向や米景況感鈍化等円巻き戻しの材料には反応しやすい状況か。			
河合	ブル	158.50 ～ 152.00	先月初急落後ジリ高推移するドル円は、転換点となった158円近辺での介入警戒感を孕みつつ、月前半は底堅い展開を予想。月中盤に開催される本邦金融政策決定会合がハトな内容となれば、介入警戒感は更に強まり、急落の可能性も。			
川端	ベア	160.00 ～ 155.00	介入への警戒感に加えて足元で円金利の上昇に弾みがついており、ドル円は高値圏でのレンジ相場を想定。月初及びインフレ指標次第ではあるが、年後半とみられる米国の政策変更までは距離があり暫くは横ばい推移が続くのではないか。			
加藤	ベア	158.00 ～ 148.00	円独歩安の状況に変化はなく、投機的にも参加者はドルのデイトップを拾って行く姿勢を崩していない。しかしながら当局としても平成の高値160.35を意識せざるを得ない段階に来ていると思う。			
山崎	ブル	159.00 ～ 153.00	上方向を予想。ドル円は、上では介入警戒が根強く上値重いと思われるものの、下方向となる材料も乏しく、引き続き円安方向への推移と考える。BOJ・FOMCに注意したい。			
山口	ブル	161.00 ～ 155.00	日銀から円安を警戒する発言が出たり、金利上昇を容認する姿勢を見せているが積極的に金融政策の引き締めを継続するとは考えにくい。一方、FRBによる早期利下げ観測は後退しており、ドル買いフローが続く中ドル円は底堅い。			
田川	ブル	161.00 ～ 153.00	現状の高値圏での推移を想定。積極的に円を買う理由は見つからず。唯一の円高材料である為替介入については、輸入実需、個人投資家共に絶好のドルの買い場として待ち構えている様相。よって、ドル/円は下がりづらいだろう。			
松永	ブル	158.50 ～ 153.50	米国では労働市場と個人消費に陰りが見られるものの、インフレ鈍化は依然道半ば。FRB高官の発言を見てもインフレ鈍化には時間を要するとの認識が多く示されており、6月会合で利下げの具体的な道筋を示す可能性は低いとみる。			
上遠野	ブル	160.50 ～ 153.50	米国ディスインフレの鈍化を背景に根強いドル買いが継続。日銀のタカ派シフトも賃金上昇効果や消費マインドを見極めつつ緩やかなペースが予想され、金利差が大きく縮小する展開は見込みにくい。			
大熊	ベア	159.00 ～ 152.00	政府・日銀は円安に対する警戒感を強めており、6月の日銀会合でもタカ派姿勢を示すと思われる。未だ底堅い米経済を背景に、FRBによる利下げ観測は後退しているが、一方的な円売りには進みづらく、ドル/円の上値は限定的。			
范	ブル	160.00 ～ 154.00	直近の経済指標ではインフレ減速の兆候が見られるものの、そのペースは緩慢であり、利下げを判断するにはまだ材料不足か。日米金利差が開いている状況下ではドル買い円売り地合いが継続するものと予想。			
伊藤(基)	ブル	161.00 ～ 154.00	米国における物価上昇圧力の鈍化が緩慢な状況では、Fedは容易にハト派姿勢を見せることはできないと考えており、ドルが買われやすい展開は6月も続くだろう。日銀が大きくスタンスを変えない限りドル円はじりじりと上昇するであろう。			
鈴木	ブル	159.50 ～ 154.50	経済指標にはやや怪しい結果が出始めているものの、Fed高官の発言は依然として利下げに慎重な姿勢を示す内容が多い。根強い円売り需要も背景に、引き続き底堅い推移になることを予想する。			
西	ブル	160.00 ～ 154.00	雇用や景況感など米国経済にも緩みが見られるが、FRBは数か月間様子見の構えでタカ派スタンスを簡単に崩すことはないだろう。本邦サイドでは追加利上げ期待、金利上昇などタカ派機運はあれど継続的な円買いは期待しにくい。			
松木	ブル	160.00 ～ 153.00	足許円金利上昇もドル円への影響は限定的。むしろFED高官が総じてタカ派姿勢を示し米金利が上昇する中、改めて日米金利差が意識されやすい。急激な上昇には警戒感があるもののじりじりと上昇する展開か。			

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0700 ~ 1.1000
EUR/JPY 166.00 ~ 173.00

金融市場部 為替営業第一チーム 河合 良介

■ 先月の為替相場

先月のユーロドルは、ECBによる6月利下げがほぼ織り込まれる中、欧州で強弱入り混じるも改善傾向にある経済指標が発表される一方、月中盤には、弱い米経済指標を受けユーロドルは上昇。月後半、米金利上昇により調整する場面も見られたが、月を通せば1.06半ばから1.08台前半へ上昇する展開となった。

(1週目) 月初、1.0667でオープン後、週安値となる1.0650をつける場面も見られたが、3日発表の米4月雇用統計が冴えない結果となると、一時週高値となる1.0812まで上昇したが流れは続かず、1.0764で越週。

(2週目) 週初6日1.0758でオープン後、強弱入り混じる独経済指標と米金利動向を眺めつつ、1.07台で方向感に欠ける狭いレンジでの値動きとなった。9日、米金利上昇を受け週安値となる1.0724に下落する場面も見られたが、米新規失業保険申請件数が事前予想を下回ると1.0785まで反転上昇。10日、4月ECB議事要旨にて6月利下げについて肯定的な内容が見られたが、市場の反応は薄。その後週高値となる1.0791まで上昇するが、タカ派なFRB高官発言を受け1.0771で越週。

(3週目) 週初13日1.0770でオープン後、14日、堅調な独5月ZEW景気期待指数を受け、1.07台後半で小幅高。NY時間、米4月PPI発表後に1.07台半ばまで軟化する場面も見られたが、翌15日、市場予想を上回るユーロ圏3月鉱工業生産に加え、市場予想を下回った米4月CPIと米4月小売売上高を受け、1.0869まで上昇。16日には週高値となる1.0895まで上伸したが、その後はECB高官のハト派な発言や米金利上昇が重しとなり、じり安の展開に。17日、欧州株の軟調地合いを横目にユーロドルは下落し、結局1.0868で越週。

(4週目) 週初20日1.0872でオープンし週高値の1.0884ドルまで上昇後、週前半は米金利動向を眺めながら1.08台前半へ軟化。23日、ユーロ圏5月製造業PMI(速報)の良好な結果を受けて反転上昇する場面も見られたが、その後発表された米経済指標の結果を受け、週安値の1.0805まで下落した。翌24日、ECBナゲル独連銀総裁が6月初回利下げ後の利下げペースについて慎重な発言をすると、ユーロ買い優勢となり、結局1.0846で越週。

(5週目) 週初27日1.0847でオープンし、28日は米金利低下を受けたドル売り優勢の中、一時週高値の1.0889をつけたが、翌29日には米金が入り上昇する動きに、1.0800まで下落、30日に週安値1.0789まで続落し、31日東京11:00時点でユーロドルは1.0820付近で推移している。

■ 今月の見通し

今月のユーロドルは、月前半から中旬にかけて開催予定の欧米の中銀会合が最大の注目材料。欧州は、利下げ決定かつ利下げ路線踏襲、米国は、サプライズなく無難な通過を予想するが、経済環境の改善を背景とした欧州サイドの利下げ時期の後ずれ期待の高まりから、先月に続き上昇する展開を予想する。

ユーロドルは4月、市場予想を上回った米3月CPIや金利据え置きを決定したECB政策理事会後のラガルドECB総裁の会見で6月利下げが示唆されたことで1.06近辺まで下落。一方、5月に入るとECBの6月利下げを織り込みつつ、米国で市場予想を下回った米4月CPIと米4月小売売上高が発表されたタイミングで急伸したように、茲許、月半ばに発表された経済指標、特に米CPIの結果を受けた米国金融政策への思惑で大きく値動きしている。

今月の最大の注目は、6日のECB政策理事会、11・12日のFOMCであるが、今回ECBは▲25bpの利下げ、FOMCは金利据え置きがメインシナリオで結果自体は市場もほぼ織り込み済み。各総裁から会合後の会見にて、今後の金融政策の方向性を示唆するメッセージが発せられるかどうか注目が集まる。

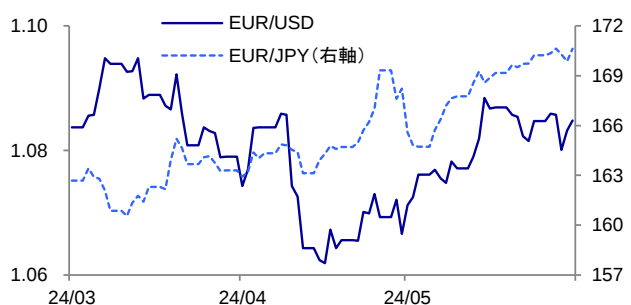
パウエルFRB議長の直近5/14の講演におけるコメント(「現行の政策金利を据え置く可能性が高い」、「インフレ低下の自信得るまで、より時間がかかりそう」)から推察するに、米国はサプライズなく無難に通過しそうだが、同日発表される米5月CPIについては、上記記載の通りユーロドルはCPI前後に値幅を伴う動きをする傾向があり注意が必要。

一方、ラガルドECB総裁からは従来路線を踏襲し時期未定ながら利下げ継続を示唆するコメントが出てくるのではないかと考えるが、欧州経済回復を示唆する指標が出てくれば、欧州利下げ時期の後ずれ期待から欧米中銀会合後の月後半にかけてユーロが対ドルで強含む展開を予想する。

ECB政策理事会に向け、5月31日日本時間18:00発表予定のユーロ圏5月HICPにも注目。(5月31日12:00現在)

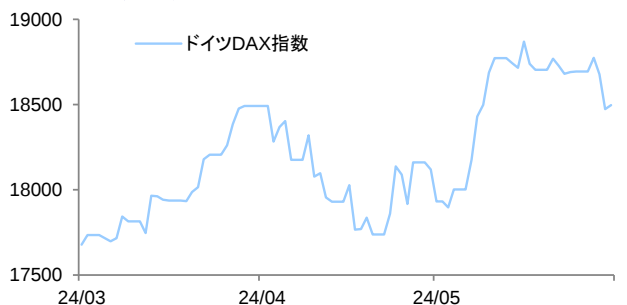
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/2	ユーロ圏製造業PMI	4月	45.6	45.7	46.1
5/6	ユーロ圏サービス業PMI	4月	52.9	53.3	51.5
5/6	ユーロ圏コンポジットPMI	4月	51.4	51.7	50.3
5/7	独製造業受注(前月比)	3月	0.4%	-0.4%	-0.8%
5/14	独CPI(前年比)	4月	2.2%	2.2%	2.2%
5/14	独ZEW景気期待指数	5月	46.4	47.1	42.9
5/15	ユーロ圏GDP(前年比)	1Q	0.4%	0.4%	0.4%
5/15	ユーロ圏鉱工業生産(前月比)	3月	0.4%	0.6%	1.0%
5/17	ユーロ圏CPI(前年比)	4月	2.4%	2.4%	2.4%
5/27	独IFO企業景況感指数	5月	90.4	89.3	89.4

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	8名	1.1000 ～ 1.0700	ベア	7名	1.0900 ～ 1.0600	※ レンジは中心値
宮地	ブル	1.1000 ～ 1.0650	ECBによる利下げは織り込み済み。むしろ、米国の景況感鈍化や米国金利の上昇圧力一服から、ドルが弱含む地合を予想。クロス円の売りには要注意だが、ユーロはドル売りの恩恵を受けそうだ。			
河合	ブル	1.1000 ～ 1.0700	欧米の中銀会合にて、欧州は、利下げ決定かつ利下げ路線踏襲、米国は、サプライズなく無風を予想するが、経済環境の改善を背景とした欧州サイドの利下げ時期の後ずれ期待から、ユーロドルは、先月に続き、上昇する展開を予想する。			
川端	ベア	1.1000 ～ 1.0600	6月のECBでの利下げは既に市場に織り込まれており相場を動かす材料にはなりにくい。域内の景況感に改善の兆しがみられるが、追加利下げを囁すには時期尚早であり米金利に従属的な展開の継続を予想。レンジ相場の継続を予想。			
加藤	ブル	1.1000 ～ 1.0800	ユーロが先に利下げに動くことは既定路線となりつつあり、為替市場が先読み・先取りの市場であることに鑑みれば、市場参加者がユーロの先行きに関してベアに見過ぎていると考える。			
山崎	ベア	1.0900 ～ 1.0650	1.09から1.07の間のレンジ推移を予想。FOMCや米経済指標により、米国の政策変更に関する織り込みの変化があれば、下方向に動くものとする。			
山口	ベア	1.0900 ～ 1.0600	欧州圏のインフレ低下を背景にECBは6月に利下げを開始すると見られている。断続的な利下げの織り込みが進むとユーロ安に転じやすい。ただし、世界的な株高を背景としたクロス円の買いが続くと下値も限られる。			
田川	ベア	1.1000 ～ 1.0550	前月の本欄とビューは変わらず。6月利下げは既定路線で相場に影響はなし。追加利下げに対するヒントが注目点。追加利下げコンセンサスが出来上がらなければ、ドルの動向に左右。ユーロ/ドルは横ばいからやや下目線で臨みたい。			
松永	ブル	1.0950 ～ 1.0700	ECB高官は、年内複数回の利下げに意欲を見せるものの、サービス部門の中心に欧州のインフレ再加速の懸念は強い。経済の底打ち感もみられる中、ユーロは底堅い動きが継続しよう。			
上遠野	ベア	1.0900 ～ 1.0600	6月利下げ後の追加利下げの可能性も燦る中で、FRBのタカ派スタンスの継続という既定路線の対比感からユーロは弱含みの展開をみておきたい。			
大熊	ブル	1.1000 ～ 1.0650	6月利下げは確実視されているものの、市場ではすでに織り込み済みの為、影響は限定的か。足元の欧州経済は堅調さを取り戻していることもサポートとなり、底堅い展開を予想。			
范	ブル	1.0900 ～ 1.0600	6月の利下げは市場織込済み。景況感改善も見られる中、市場が先の利下げを織込むには追加の材料が必要か。方向性が見えない中、レンジ相場を予想。			
伊藤(基)	ベア	1.0900 ～ 1.0650	欧州経済が思いのほか底堅く推移しているだけに、ECBによる利下げは慎重なスタンスのもと行われるだろう。また、先々の利下げ織込みが剥落する場面も想定されユーロのサポート材料となる			
鈴木	ブル	1.1000 ～ 1.0700	6月会合での利下げ開始は既定路線も、その後の連続的な利下げにはECB高官の発言からも現状疑問符がつく。景気動向にも底打ち感があり、底堅い推移になることを予想する。			
西	ブル	1.1000 ～ 1.0700	6月会合での利下げは規定路線。直近公表された1-3月期妥結賃金の前期比上昇、堅調な域内経済指標を考慮すれば、継続的なデysinフレは期待しにくい。米経済の振られやすいが、やや底堅い推移を想定。			
松木	ベア	1.0900 ～ 1.0700	一部ECB高官からはハト派な発言が続いており、焦点は6月ECBにて連続的な利下げが発信されるか。とはいえ相応にハト派姿勢は織り込まれており、ややベア目線も対ドルではレンジ推移が基本線か。			

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2600 ~ 1.3200
GBP/JPY 197.00 ~ 205.00

欧州資金部 中島 將行

■ 先月の為替相場

5月の英ポンド相場は5月28日時点で対ドルで+2.2%、対円で+1.7%と反発した。上旬にはBOEの早期利下げの可能性が意識される場面もあったが、22日に発表された英4月消費者物価指数(CPI)が市場予想を上回ったことを受け、利下げ期待が大幅に後退、ポンドも上昇した。第1週のポンド相場は対ドルで反発。5月1日のFOMCでは、パウエルFRB議長が追加利上げの可能性は低いとし、市場でハト派的との受け止めが広がった。FOMC後には米金利・ドル低下の流れとなっている。第2週のポンド相場は対ドルで反発。9日のBOEの金融政策発表がハト派的な結果だったことを受けてポンドが下落する場面もあったが、その後に発表された米失業保険新規申請件数が市場予想を上回った(労働需給の緩和を意識させる内容となった)ことで、ポンドは反発。翌10日に発表された1〜3月期の英実質GDP成長率が前期比+0.6%と2023年10〜12月期の同▲0.3%からプラスに転換し、市場予想の同+0.4%も上回る結果となったことを受けて、ポンドは上げ幅を拡大した。第3週のポンド相場は対ドルで反発。15日公表の米4月CPIが前月比で6か月ぶりに減速を示したこともあり、米利下げ期待が回復、グローバルにドル安となった。14日に発表された労働市場関連統計は、まちまちな結果となった。1〜3月期の失業率は0.1%ポイント上昇し4.3%と昨年夏以来の高水準となった。ボーナスを除く賃金上昇率は横ばいだったが、民間部門の賃金上昇率は前年比+5.9%に鈍化し、中銀予想の同+6.0%を下回った。第4週の英ポンド相場は対ドルで+0.3%続伸。22日に発表された英4月CPIが市場予想を上回ったほか、同日にスナク首相が7月4日に総選挙を実施すると表明したことを受けて、BOEの早期利下げ期待が大幅に後退した。週後半には、FRB高官のタカ派発言を受けてドル高・ポンド安に押し戻される場面もあったが、金曜日引けにかけて再びポンドは上昇した。なお、対円で4月29日以来となる200円をつけている。

■ 今月の見通し

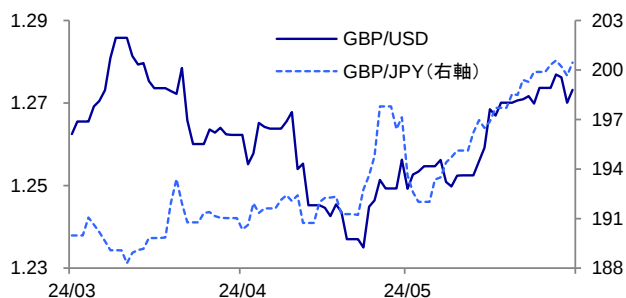
6月のポンド相場は政策金利の高止まり観測が引き続きサポート材料となる。6月20日のBOE会合に向けた2つの統計、6月11日公表の4月分週平均賃金と6月19日公表の5月CPIは重要だが、4月CPIの結果や7月に総選挙を控えることを考慮すれば、6月会合での利下げの可能性は既に消滅したと見て良いだろう。改めてBOEの5月会合を振り返ると、以下の3点でハト派的な内容だったと言える。(1)ラムズデン副総裁が利下げ票を新たに投じ、2月、3月と利下げ票を投じていたディングラ委員に加えて利下げ支持が9名中2名となった。(2)声明文に「MPCは今後のデータ発表と、データがインフレ圧力のリスク後退を示しているかを検討する」という見解が挿入された。さらに、ペイリー総裁も6月利下げの可能性を否定しなかったほか、市場が想定する以上に金融緩和を行う可能性も示唆した。(3)市場の政策金利見通しを前提としたインフレ見通しが全体的に引き下げられ、2024年末の見通しが2月時点の前年比+2.75%から同+2.5%に引き下げられた。しかし、4月CPIの結果はBOEの予想を上回るインフレの粘着性を示すものとなった。ヘッドラインは前年同月比+2.3%と3月分の同+3.2%から伸びが鈍化したものの、市場予想の同+2.1%を上回った。Ofgem(英ガス・電力市場局)が4月に標準家庭のエネルギー価格の上限を引き下げたことに伴い、エネルギー価格はCPIインフレ率の押し下げ要因になったものの、サービスインフレ率は前年同月比+5.9%と4月の同+6.0%からほぼ横ばいとなった。BOEは5月のインフレーションレポート公表時に、サービスインフレ率は同+5.5%に低下すると見込んでいたが、はるかに小さい落ち込みとなった。サービスインフレ率の高止まりについて、英国における最低賃金にあたる全国生活賃金(NLW)が4月に前年同月比+9.8%もの大幅な引き上げとなったことが影響した可能性がある。今後発表されるCPIや労働市場関連統計(特に賃金)のデータ次第ではあるが、賃金上昇、サービスインフレ率高止まりの状況が鮮明となるリスクを踏まえれば、8月1日の会合での利下げも怪しいのではないかと思われる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の有名な調味料』
ロンドンは世界中から移民が集まっていますので、インド料理、タイ料理、ベトナム料理のほか日本食材店、レストランも揃っており、世界中の調味料を調達することができます。ただ、「当地ならではの」と聞いてこちらの人がイメージするのは、フィッシュ&チップスに添えられているケチャップとタルタルソースではないでしょうか。全然オリジナリティーはありません。基本的に、ロンドンのレストランでは料理が味付けはあまりされずに「そのまま」出てくることが多いので、調味料で自分好みに味付けをして食べます。子供達もすっかりこのスタイルに慣れ、「ロンドンで好きな食べ物は何?」と聞いたら「塩」という答えが返ってきました。大人になって生活習慣病にならないか心配です。

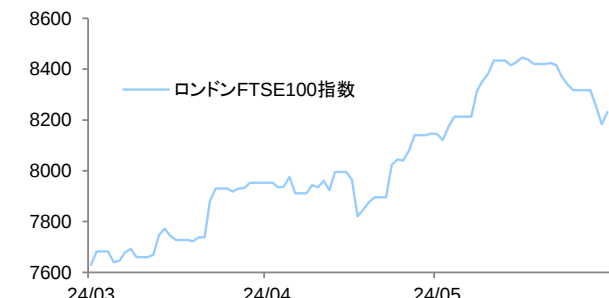
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/1	ネーションワイド住宅価格指数(前年比)	4月	1.2%	0.6%	1.6%
5/9	イングランド銀行政策金利		5.25%	5.25%	5.25%
5/10	GDP	Q1	0.0%	0.2%	-0.2%
5/10	鉱工業生産(前月比)	3月	-0.5%	0.2%	1.0%
5/10	製造業生産(前月比)	3月	-0.5%	0.3%	1.2%
5/14	週平均賃金(前年比)	1-3月	5.5%	5.7%	5.7%
5/14	失業率	3月	4.3%	4.3%	4.2%
5/22	CPI(前年比)	4月	2.1%	2.3%	3.2%
5/23	製造業PMI	5月	49.5	51.3	49.1
5/23	サービス業PMI	5月	54.7	52.9	55.0

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6400 ~ 0.6800
AUD/JPY 99.40 ~ 106.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

5月は0.64台後半から0.67台へ上昇し、0.66台前半で越月した。1日、FOMCは政策金利据え置きを決定。パウエルFRB議長がインフレ低下ペースの減速を認めつつも、次の動きが利上げとなる可能性は低いと述べた事を受け米金利が低下。豪ドルは0.6540まで上昇した。3日、軟調な米4月雇用統計結果から早期米利下げ観測を受けたドル売りを背景に豪ドルは0.6580近辺から0.66台半ばまで上昇。早ければ9月から米利下げ開始との見方が強まり11月から前倒しされ、年内2回の利下げを再び織り込んだ。7日、豪1〜3月期小売売上高が前期比で▲0.4%と予想を下回った。RBAは5月会合で4.35%で政策金利据え置きを決定し、声明文がハト派的と受け止められ0.6590近辺まで下落。9日、中国4月貿易収支が好感され、人民元買いから豪ドルは支えられ、更に米金利上昇や米失業関連指標が軒並み弱含んだ事でドル売りとなり、0.6620へ上昇した。14日、米4月PPIが予想を上回り、ドル買いが先行。豪ドルは0.6578まで一時急落するも、前月値が▲0.1%に下方修正された事が材料視され、ドル売りに反転。豪ドルは0.6630へ上昇。15日、中国政府が“売れ残り新築マンションを地方政府が買い上げし再活用する案”を検討との報道で人民元が急騰。豪ドルも連れ高となり0.6650近辺まで上昇した。米4月CPIコアと同小売売上高がいずれも予想を下回り、豪ドルは0.67手前まで上昇。16日、豪4月雇用統計が予想比悪化した事で豪ドルは頭を押さえられ0.66台後半で推移。17日、中国4月小売売上高や不動産指標が弱含み、豪ドルも連れ安となり0.66台半ばまで下落。但しNYダウ平均が史上初の4万ドル台に乗ると、0.67近辺まで上昇した。20日、複数のFRB高官のタカ派的な発言に米金利が上昇し0.6670近辺まで下落した。21日、RBA5月議事要旨では利上げについて議論されていた事が明らかとなり、豪国債利回りが上昇するも中国株が重く推移する動きに豪ドルは0.66台半ばまで下落した。22日、米5月FOMC議事要旨はタカ派寄りと解釈されドル買いの反応。豪ドルは0.66台前半まで下落。23日、米5月PMI各種が予想値を上回り、好調な企業活動とインフレ再加速を示唆する内容となった事でFRBが利下げを急いでいないとの見方が強まりドル買い優勢に。豪ドルは一時0.66台を割り込んだ。28日、豪4月小売売上高は前回から回復も、事前予想を下回り低調な伸びに留まった。30日、豪4月CPIが3.6%と予想値を上回り、5か月ぶりの水準となった事で、豪ドルは0.6670近辺まで上昇も、米金利が上昇幅を拡大すると0.6610近辺へ下落。5月は0.66台半ばで越月した。

■ 今月の見通し

6月の豪ドルは上方向に値幅を広げる可能性が高いとみる。弱含む中国株や地政学リスクの再燃、米金利が上昇する場面等では頭を押さえられるとみるが、一方で5月RBA会合では利上げについて議論したという事実ができてしまっており、且つ、豪4月CPIも僅かに上昇している為、豪中銀のインフレ目標である2〜3%に到達するにはまだまだ時間がかかる事を考えると今後上方向に値幅を広げる可能性が高い。

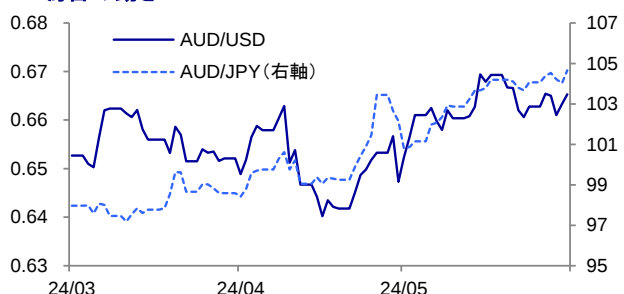
5月の豪ドルは軟調な米指標や中国の不動産関連でこ入れ案で0.64台後半から0.67台前半への伸びを見せ、下値を切り上げこそしたものの、米金利上昇に阻まれ0.67台定着は達成できなかった。6月はレンジを切り上げていけるかを占う上でも、この0.67台定着ができるかが一つの焦点となろう。

22日に発表された米5月FOMC議事録要旨でより長期に高水準での政策金利維持が望ましいとの認識で当局者が一致していたことが明らかとなり、年内の利下げ織り込み(1回=25bp)はこれまでの2回から1回となり、初回利下げも11月から12月に後ずれした。一方、豪州では月初から既に1回の利下げさえ織り込む地点は年内に見られなかったものの、30日に発表された豪4月CPI(前年同月比)が前月の3.5%から0.1%ポイント上昇の3.6%となったことで、市場の利下げ織り込みが更に浅くなっている。引き続きデータ次第で利下げ織り込みやその時期が前後する可能性は残されているものの、現状の両国の経済指標に鑑みると利下げの順番としては米国が先に動き、豪州が遅れてフォローする展開がしっくりいく。このため、豪ドル下値は基本支えられ易くなるとみる。

6月の注目材料としては、5日(水)豪1〜3月期GDP、7日(金)米5月雇用統計、12日(水)米5月CPI、米6月FOMC、13日(木)豪5月雇用統計、18日(火)RBA会合、26日(水)豪5月CPI、27日(木)米1〜3月期コアPCE価格指数、28日(金)米5月PCEコア価格指数等が発表予定。中銀会合に関わらず、FRB高官発言に対するプライスアクションに注意し、RBA会合声明文や議事録で利下げ期待を削ぐような内容が出てくれば、豪ドルはさらに押し上げられる可能性が高い。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
5/2	住宅建設許可件数
5/2	貿易収支
5/7	RBAキャッシュレート
5/15	賃金指数(前年比)
5/16	雇用者数変化
5/16	失業率
5/16	正規雇用者数変化
5/16	非常勤雇用者数変化
5/28	小売売上高(前月比)
5/29	CPI YoY

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
3月	3.4%	1.9%	-0.5%
3月	A\$7300m	A\$5024m	A\$6591m
5月	4.35%	4.35%	4.35%
1Q	4.2%	4.1%	4.2%
4月	23.7k	38.5k%	-5.9k
4月	3.9%	4.1%	3.9%
4月	-	-6.1k	26.6k
4月	-	44.6k	-32.5k
4月	0.2%	0.1%	-0.4%
4月	3.4%	3.6%	3.5%

カナダドル相場

予想レンジ:

USD/CAD 1.3500 ~ 1.3900
CAD/JPY 112.00 ~ 117.00

米州資金部カナダ室 芦崎 瑞穂

■ 先月の為替相場

月初1日のFOMCでは、市場の予想通り政策金利据え置きが決定された。パウエルFRB議長の会見では利下げを急がない姿勢が示された一方、次の政策変更が利上げになる可能性は低いとの言及があった。市場が予想するよりもハト派な内容だったことからUSD/CADは1.3704へと急落。3日の米4月雇用統計では失業率が悪化し、非農業部門雇用者数も予想を大きく下回り減少。また平均時給(前年比)の伸びは2021年6月以来の低水準となった。今年の米利下げ回数が2回になるとの予想が一時的に強まった。米金利低下に連れ、USD/CADは1.3610まで急落。しかし、今回の米雇用統計の結果は、FRBが利下げに踏み切るほど低調ではなかったとの見解が市場で徐々に強まり、USDドルが1.36台後半まで買い戻された。7日カシユカリ・ミネアポリス連銀総裁がインフレは未だ根強いとし、利上げの可能性を示唆。USD/CADは1.37台半ばへと上昇したが、米新規失業保険申請件数から米労働市場の軟化進行が示されたことで、上値は重かった。10日カナダ4月雇用統計は失業率が予想を下回り、雇用者数は前回から大幅に増加。平均時給(前年比)の伸びは予想を上回ったが、前回から伸び率が鈍化した。カナダ中銀の6月の利下げ開始観測が後退し、1.3635までカナダドルが買われる場面が見られた。その後は米インフレ軟化予測が市場で強まり、USDドルが弱含みで推移。15日米4月消費者物価指数(CPI)の伸びが鈍化したことや、米4月小売売上高やニューヨーク連銀製造業景気指数の結果が冴えず、FRBの利下げ開始が9月になるとの予測が高まり、USD/CADは下落。オーバーナイトで1.3590まで値を下げた。その後は狭いレンジでの推移が続き、21日カナダ4月CPIの伸びが鈍化し、インフレ率が4カ月連続でカナダ中銀の目標レンジである1-3%に収まっていることが示された。カナダ中銀の6月の利下げ開始観測が高まり、カナダドルが売られUSD/CADは1.367付近へと上昇。22日に公開されたFOMC議事録要旨の内容が、パウエル議長の会見よりもタカ派的だったことを受けUSDドルが伸続。また23日米新規失業保険申請件数が2週連続で減少したことや、米5月総合購買担当者景気指数(PMI)速報値が54.4と2年超ぶりの高水準となり、USD/CADは1.374付近へと続伸した。月末はFRB当局者のタカ派発言や米債利回りの上昇に、USDドル高継続の後、米第1四半期GDP改定値の低下にUSDドルが売られ、1.36台半ば付近へと下落した。

■ 今月の見通し

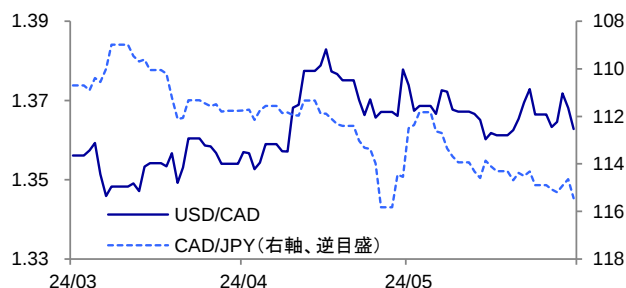
先月のカナダ中銀金融安定報告書では、高い金利で債務返済コストが上昇しており、失業率が悪化すれば一部の債務者に大きな経済的ストレスが生じ、よりクレジット依存が強まる懸念が示された。また主要都市ではオフィスの空室が増加しており、オフィス不動産市場が圧迫されているとし、商業用不動産セクターへのエクスポージャーが最も高いとされる中小規模の銀行がより厳しい立場にあるとした。大企業は債務負担をうまく処理している一方で、中小企業の倒産は過去1年間で急激に増加。また年金基金やヘッジファンドなどの資産運用会社が、特定の取引戦略を実施するために大きなレバレッジを利かせており、市場で金利の推移に関する予想に変化があった場合には、債券価格が突然変動する可能性があり、金融システム全体に波及する可能性があるとも予測された。カナダ中銀のマックレム総裁は、前回の政策金利決定会合後、インフレ率の低下傾向が長く続くかを確認したいと述べた。カナダ中銀は早すぎる利下げによる物価の高騰を警戒。また、FRBの利下げ開始時期に注意を向けており、カナダ・米国の金利差がカナダドルに下押し圧力をかけ、輸入品の価格を上昇させるとの懸念を示している。カナダのインフレ率は低下し、利下げの準備は整いつつも、FRBの利下げ開始時期が不透明。今月5日にカナダ中銀が金利引き下げに踏み切るかどうかは市場の注目が集まっている。金融市場では、カナダ中銀が利下げに踏み切る確率が約60%織り込まれている。12日にはFOMCが開かれる。金利据え置きが市場のコンセンサスとなっているが、経済見通しやパウエル議長の会見で利下げ開始時期のヒントが出されるかに注目したい。同日に米5月消費者物価指数の発表も予定されており、ボラティリティが高くなると予想される。今月はカナダ中銀会合とFOMCの結果を受けての両国の金利差に、市場は大きく反応すると予測される。米インフレ率の低下期待によるUSDドル下押し圧力にも注意。ドライブシーズンの到来や、OPECプラスの減産継続見通しに原油価格の底堅い動きがカナダドルをサポートすると予想。USD/CADは1.35-1.39での推移を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の有名な調味料』
カナダならではの調味料と言えば、ケチャップしか思い浮かびません。ほとんどの家庭や、ファーストダイニングレストランでは、ケチャップが常備されています。フレンチフライなどの揚げ物類、ハンバーガー、グリルドチーズサンドイッチ、チキンテンドーにケチャップは欠かせません。ケチャップ味のポテトチップスはカナダ発祥で、ケチャップ味のコーンチップスやポップコーンも販売されており、カナダ限定のお土産としてもお勧めです。カナダでは長い間、オンタリオ州の南西部に位置するエッセクス群で、カナダの産のトマトを使用したハインツのケチャップが作られていました。(ハインツは米国の食品メーカーです)しかしコスト削減のため、10年前にその工場は閉鎖されてしまいました。これはカナダ人に長く愛され続けたカナダのコーヒーチェーン店"Tim Horton's"が、ブラジルの会社に売却された時と同じく、大変ショックな出来事でありました。一時は多くの人が米国産となったケチャップをボイコットし、多くのファーストダイニングレストランなどでは、カナダ産の"French's Ketchup"を目にすることが多くなりました。スーパーの商品棚にもFrench's Ketchupが手に取りやすい場所に置かれ、その存在感は大きくなって行きました。米国産となったハインツのケチャップのボトルの裏には、消費者に警告するかのよう、通常よりもかなり大きく"MADE IN USA"との文字がプリントされています。またカナダで販売されているケチャップは米国産のものと比べ、高フルクトース・コーンシロップが使用されており、健康的だとも言われています。

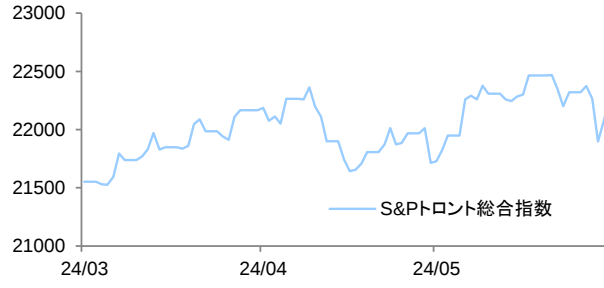
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/1	S&Pグローバル・カナダ製造業PMI	4月		49.4	49.8
5/2	貿易収支	3月	1.21b	-2.28b	0.48b
5/10	雇用ネット変化率	4月	20.0k	90.4k	-2.2k
5/10	失業率	4月	6.2%	6.1%	6.1%
5/13	住宅建設許可(前月比)	3月	-4.3%	-11.7%	8.9%
5/15	住宅着工件数	4月	240.0k	240.2k	242.3k
5/15	製造業売上高	3月	-2.8%	-2.10%	0.9%
5/21	CPI(前年比)	4月	2.7%	2.7%	2.9%
5/21	CPI季調前(前月比)	4月	0.5%	0.5%	0.6%
5/24	小売売上高(前月比)	3月	-0.1%	-0.2	-0.1%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1340	～	1400
KRW/JPY	11.11	～	11.76
JPY/KRW	8.50	～	9.00

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 山内 脩平

■ 先月の為替相場

5月のドル/ウォン相場は方向感に欠ける推移。月初のドル/ウォンは1,378.2ウォンでオープン。オープン後一時1,382.3ウォンの月高値をつけるも、前日のFOMCが警戒された程タカ派な内容では無かったことで、その後押し戻され、1,370ウォン台半ばでの推移。その後も米金利が低下傾向で推移する中、翌3日には1,360ウォン台前半まで下落した。

翌週6日は韓国休日にも米金利が低下する動きに、7日に1,350ウォン台半ばでオープン。その後約1か月振りの安値圏では輸入勢によるドル買い意欲が見られ底堅い推移となった。8日以降はFed当局者によるタカ派な発言が散見されたことで米金利が持ちなおし、1,360ウォン台を回復。人民元や日本円が弱含み推移したことでウォンも連れ安推移となった。週末にかけては徐々に市場の関心が米CPIに移る中で動意に乏しい推移となり、1,360ウォン台を中心とした推移が続いた。

翌週13日・14日は米CPIを控えた警戒感から1,370ウォン付近でオープン後、同水準で小動き。15日は韓国休日にも米CPI発表後、米金利が低下する動きに16日のドル/ウォンは1,340ウォン台半ばまで急落。1,344.9ウォンの月安値をつけた。

翌週20日以降は一転し、ドル高推移。Fed高官によるタカ派な発言を受けた米金利の上昇や人民元安進行を受けて上昇基調で推移。23日にBOK会合が開催され、予想通り3.5%の政策金利を維持され、総裁から「利下げタイミングの不確実性は高まった」との発言が伝わるとややタカ派と捉えられ直後にウォンが強含むも、ドル/ウォンの下値は限定的だった。

翌週27日以降は方向感乏しく、1,360ウォン前後での推移が続くも、月末にかけて再度米金利が上昇推移したことで、ドル/ウォンは上昇。30日クローズ時点で1,379.4ウォンで推移。

■ 今月の見通し

6月のドル/ウォンは揉み合い推移を予想。

5月23日にBOK会合が実施されるも、事前予想通り金融政策現状維持が決定された。BOKはインフレ率について今年が2.6%、来年が2.1%との見通しを維持するも、声明文では「物価見通しの上振れリスクが大きくなっている為、物価が目標水準に収束するとの確信するのは時期尚早」としている。

直近のドル/ウォンは米金利動向に上下する展開が続いており、韓国の金融政策に動きが見られない中で、この傾向は6月も継続しよう。米国の利下げ開始時期は当初想定よりも後ろ倒しになっているものの、依然として不透明な状況。

4月の韓国の半導体輸出は前年同月比56.1%増加するなど、輸出は堅調に推移。貿易収支も約15億ドルの黒字で11か月連続黒字をキープするなど、実需面での回復はウォン買のサポート材料となるも、米金融政策に方向感が見られるまで揉み合い推移は継続か。

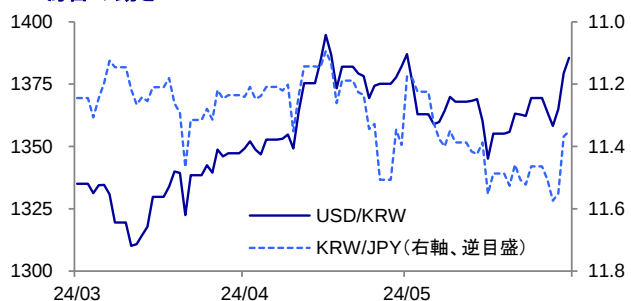
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の有名な調味料』

当地の調味料ということで真っ先に思いついたものは、コチュジャンでしょうか。ビビンバに加える定番の食べ方のみならず、色々な場面で使用されています。あとはテンジャン(韓国味噌)もよく食べます。主にはテンジャンチゲと呼ばれるスープでの用途を目にしますが、焼肉など韓国料理によく合い、飲み会の中盤・終盤ともに重宝します。あとは、サムジャンも定番です。甘辛い味付けの合わせみそのような調味料で、豚肉を焼いたサムギョプサルや肉をゆでたボッサムなど、肉を野菜で包んで食べる料理に使うのが定番となっています。スーパーなどで購入する場合、コチュジャンは赤色のパッケージ、サムジャンは緑色のパッケージで売られていることが多いとのこと。是非お近くの韓国系スーパーなどで探してみてください。

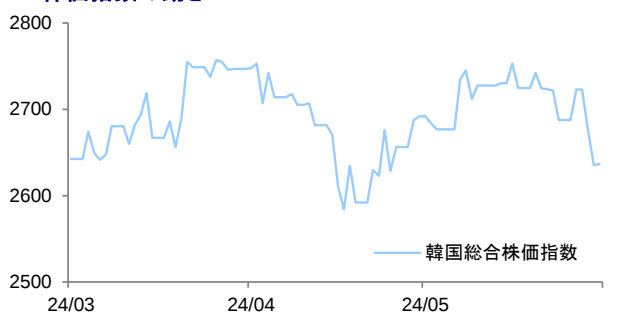
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
5/1	貿易収支
5/1	輸出(前年比)
5/1	輸入(前年比)
5/2	CPI(前年比)
5/17	失業率
5/21	消費者信頼感
5/23	BOK政策金利
5/31	鉱工業生産(前年比)

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
4月	1000M	1500M	4280M
4月	15.0%	13.8%	3.1%
4月	6.8%	5.4%	-12.3%
4月	3.0%	2.9%	3.1%
4月	2.8%	2.8%	2.8%
5月	-	98.4	100.7
5月	3.5%	3.5%	3.5%
4月	4.4%	-	0.7%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 31.60 ~ 32.60
TWD/JPY 4.75 ~ 5.00

東アジア資金部台北室 久本 和樹

■ 先月の為替相場

5月のドル/台湾ドルは下落した。

月初の5月2日は32.550でオープン。月初に実施されたFOMCにおいてパウエル議長より「物価と雇用市場のリスクはバランスしてきている」との発言が聞かれ、米金利が低下基調となっていた他、ドル円の値幅を伴った急速な下落を受け、市場で為替介入の思惑が広がる中、アジア通貨全般に買い圧力が加かっていたことなどを背景に、台湾ドル買いが進み32.30を割れこんだ。その後、8日に発表された台湾4月CPIが市場予想を下回る結果となったことを受けて、台湾ドル売りが優勢な展開となり32.40近辺まで買い戻された。

月央になると、14日に米FRBのパウエル議長より「インフレ見通しの確信は高くないが、2024年を通じて低下し続けるだろう」との見解が示された他、15日に発表された米4月CPIと米4月小売売上高が市場予想を下回る結果となっていたことを受けて、ドル売り圧力が高まる展開に。16日には台湾加権指数が史上最高値を更新し、外国人投資家による投資資金流入も後押しとなり、一時32.081まで下落した。その後、16日海外時間に発表された米4月輸入物価が市場予想を上回る結果となり米金利が上昇に転じると、ドルが買い戻される展開となり32.20台半ばまで上昇した。

月後半に入ると、20日に複数のFRB当局者より「インフレが持続的に2%目標に回帰しつつあるとは断言できない」と慎重なスタンスが示されていたことを受けて、ドル買い圧力が一段と高まり、32.30台前半まで上昇。その後、22日に米半導体大手より強気な売り上げ見通しが発表されたことを受けて、台湾における輸出回復への期待感が高まったことで、台湾ドル買いが進み32.20近辺まで下落した。月末にかけては米5月カンファレンスボード消費者信頼感指数が市場予想を上回る堅調な結果となったことや、米国債入札による需給環境の悪化懸念を受けて、米金利が上昇。リスクセンチメントが悪化し、史上最高値を更新していた台湾加権指数も反落する中、外国人投資家による投資資金引き上げが見られたことで、台湾ドルが売り戻され32.40台まで上昇する展開となった。

■ 今月の見通し

6月のドル/台湾ドルは上値の重い推移を見込む。

5月は月初に実施されたFOMCが市場で警戒されていたほどタカ派な内容とならなかったことや、米経済指標が減速を見せていたことなどを受けて、米金利上昇が一服していた他、台湾における輸出の回復への期待感が高まりを見せていたことで、台湾ドル買い圧力が強まり、ドル/台湾ドルは下落する展開となった。

6月のドル/台湾ドルについては、上値の重い展開を見込む。米国においてはFOMC会合が予定されているが、2024年内の利下げ織り込みは足許の1～2回のレンジから大きく乖離することは想定されづらい。また、台湾においてもCPIに減速感が見られ始める中、3月のように利上げに踏み切ることは想定されづらい。その為、金融政策の観点で大きく相場が動くことは期待されづらいであろう。一方で、半導体サイクルの回復に伴い台湾の輸出回復が期待される他、台湾加権指数が史上最高値を更新する中、資金流入も期待される状況下、資金需給の観点では台湾ドル買い圧力が優勢となる展開が想定される。その為、ドル/台湾ドルについては上値重く推移するであろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の有名な調味料』

当地で有名な調味料と言えば、八角です。

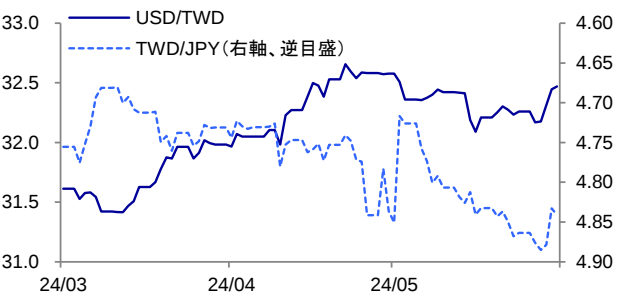
台湾の調味料として有名な八角ですが、これは中国原産の「トウシキミ」という木の果実を乾燥させたもののことを言います。中国南部やインドで主に栽培されており、日本ではあまり馴染みが無い物になっています。8つの角を持った星形をしている為、八角と呼ばれるようになりました。

八角自体は、シナモンを凝縮させたような、独特な甘い香りが特徴的で、味としては甘みと苦みが混在するものになっています。香りがかなり強いものであり分量には注意が必要ですが、豚の角煮等の肉料理全般と相性がいいとされています。

台湾では色々なものに(気づかぬ内に)八角が入っていたりします。豚の角煮はもちろん、ソーセージや鳥のから揚げなどにもスパイスとして使われていることが多いです。独特の甘い風味は、好みが分かれることが多々あります。是非台湾で、お試し下さい。

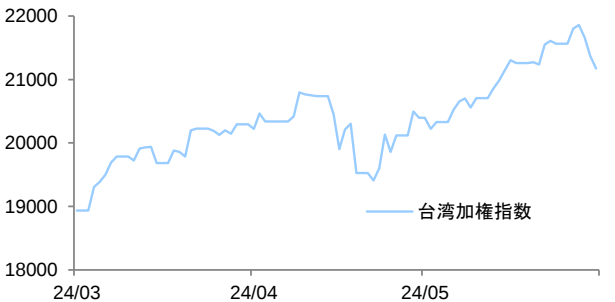
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/6	外貨準備高	4月	-	567.01B	568.10B
5/7	CPI(前年比)	4月	2.10%	1.95%	2.14%
5/8	輸出(前年比)	4月	10.15%	4.30%	18.90%
5/8	輸入(前年比)	4月	7.60%	6.60%	7.10%
5/8	貿易収支	4月	8.03B	6.46B	8.68B
5/20	輸出受注(前年比)	4月	4.50%	10.80%	1.20%
5/22	失業率	4月	-	3.39%	3.40%
5/23	鉱工業生産(前年比)	4月	-	14.61%	3.99%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7800 ~ 7.8200
HKD/JPY 19.60 ~ 20.60

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【5月の香港ドル直物相場】

香港ドルの直物相場は、香港株式の反発を背景に年初来初めて7.80台を下回った。香港株式の割安感や中国不動産セクターの改善が海外投資家に好感された。特に中国当局が不動産セクターへの支援をより積極的に行う姿勢を示したことで長期間に渡った業界の混乱を収束させるという期待が香港ドル買い圧力に繋がった。ストックコネクト(中国本土市場との株式相互取引制度)による資金流入は2600億香港ドル近くまで回復し、ハンセン株式指数は10か月ぶりの高値である19,706レベルまで上昇した事や、配当金の支払いのための香港ドル買いフローも香港ドル高圧力に寄与した。しかし5月後半は、FOMC議事録がタカ的な内容で米金利の利上げの可能性も示唆されたことによる米ドル買いや、日次で2から3ベースシスのリターンをもたらした米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレード活況だったこと、ハンセン株式指数の上昇が一巡による資金流入減速に伴って香港ドルは7.81レベルまで売られた。IPO活動が過去2年と比較して限定的だったことや米ドル/香港ドルの1年物のフォワード取引が7.76を下回った際に実需のドル買いが発生したことや香港ドル直物相場の重しとなった。

【5月の香港ドル金利市場】

短期の香港ドルHIBORカーブは香港ドル配当支払いによる香港ドル需要を見据えて上昇圧力を受け、1か月物が4.5%、3か月物が4.8%付近まで上昇した。一方で株式市場への資金流入によってHIBORオーバーナイト金利は軟調で4%付近で安定して推移した。概してHKMAによる香港ドル買い為替介入は起こらなかったことから、アグリゲートバランスは450億香港ドル近辺にて低位推移しており、香港ドル短期金利を下支えしている。香港ドルスワップ金利は、米国の労働市場や消費者物価指数(CPI)の低迷でFRBによる更なる利上げ思惑が後退したことや3年物、5年物は低下した。それに伴い香港ドルスワップ金利のキャリートレード(3年固定金利払い、3か月物香港ドル HIBOR受け)+20bpから+60bpまで上昇した。

■ 今月の見通し

【6月の香港ドル直物相場】

香港ドルの直物相場は香港株式市場に上場する中国資本系企業による配当金の支払いが見込まれることに伴って7.80台で推移すると考えている。香港株式の割安感や中国による不動産セクター刺激策によって外国投資家が香港株式に楽観的な見方をしていいる事も香港ドルの直物相場の支えとなるだろう。また、半期末の季節要因による香港ドルへの資金需要を背景に、米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードが解消される可能性もあるだろう。地域的な目線では、人民元や日本円の弱さは米ドル/香港ドルを含めた新興国市場にも影響をもたらす可能性はあるが、年後半に見込まれる米政策金利の引き下げは米ドル/香港ドルの上昇(香港ドル売り)の抑制になることが見込まれる。しかし、香港株式市場へのIPO活動は限定的になると見られており、その思惑は香港ドル直物相場の下支えには繋がらないだろう。

【6月の香港ドル金利市場】

香港ドルのアグリゲートバランスは450億香港ドルに据え置かれると予想されるものの、半期末の流動性逼迫と香港ドルの配当支払いの流れにより、香港ドルの流動性が下がり米ドル香港ドルの金利差は縮小するだろう。また、過去のトレンドに目を向けると6月の3か月物のHIBOR金利は過去10年間のうち7年間で上昇をしていることから金利上昇する機運は高い。しかし、FRBが緩和的な姿勢を示している事もあり、中期的には香港ドル金利も低下していく見通しである。

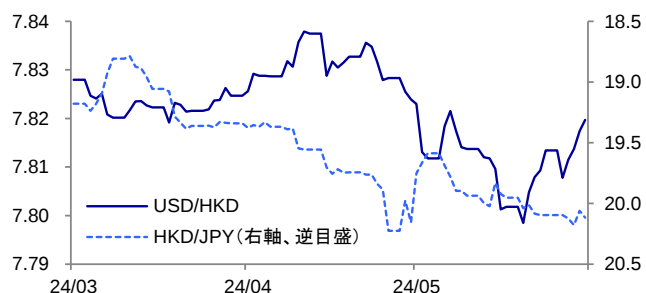
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の有名な調味料』

香港料理は多様な調味料を使用することで、豊かな風味を嗜む事ができます。特に有名な調味料は醤油、オイスターソース、そして発酵させた豆腐(腐乳)があります。これらは香港料理の要となっており、人気料理には欠かせない調味料となっています。醤油は香港料理の定番で、例えば広東風の焼きそばには醤油が味の深みを引き立てます。また、焼き物系の料理にも使用され、チャーシューなどにも豊かな風味を加えます。オイスターソースは炒め物に広く使用されており、旨味とほのかな甘みを料理に加えてくれます。特に人気なのはカイラン(中国ブロッコリー)のオイスターソース炒めです。このソースは柔らかくもパリッとした食感の緑黄色野菜との組み合わせは最高です。これらのソース以外にも甘酸っぱいホイソインソースや香り高い五香粉、ごま油やラー油などの調味料も香港料理を彩り、食通を魅力し続けます。

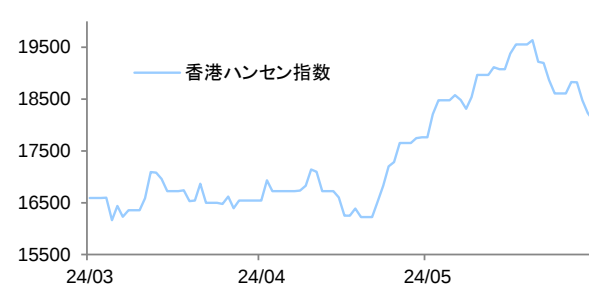
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/2	GDP(前年比)	1Q A	0.9%	2.3%	0.4%
5/3	小売売上高(価額,前年比)	3月	0.9%	-7.0%	1.9%
5/6	S&P Global Hong Kong PMI	4月	-	50.6	50.9
5/7	外貨準備高	4月	-	\$416.4b	\$423.6b
5/20	失業率(季調済)	4月	3.0%	3.0%	3.0%
5/23	CPIコンボジット(前年比)	4月	2.0%	1.1%	2.0%
5/27	輸出(前年比)	4月	2.3%	4.7%	-0.8%
5/27	輸入(前年比)	4月	2.4%	5.3%	-1.8%
5/27	貿易収支(HKD)	4月	-39.4b	-10.2b	-45.0b

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 7.1500 ~ 7.3000
CNY/JPY 21.00 ~ 22.00
100JPY/CNY 4.5400 ~ 4.7600

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 末吉 小絵

■ 先月の為替相場

5月のドル人民元(USDCNY)は小幅に上昇。

労働節明けの6日、7.20台前半でオープン。労働節中、1日のFOMCではバランスシート縮小ペースの減速が発表された他、パウエル議長の発言がハト派寄りとなつたこと、3日の米雇用統計では非農業部門雇用者数を中心に予想を下回る結果が目立ったことで、主要通貨に対してドルが売られる展開となり、USDCNYについても連休明けに400Pips程度下落して寄り付いた。その後は小幅ながらドル買いが優勢となり、8日には7.22台後半へ上昇したものの、9日に発表された中国4月貿易統計が輸出、輸入ともに市場予想を上回る伸び率となったことからUSDCNYは7.22台半ば付近を高値に上値重く推移。

13日、7.23台前半でオープン。住宅の過剰在庫解消に向けた当局支援に係る観測報道や下振れを示した米4月CPIの結果を受けてドル安元高圧力が強まり、16日には一時7.20台後半まで軟化した。その後、FED高官から利下げを急がない旨の発言等を受けて週末にかけてはドル高地合いとなり7.22台を回復している。

20日、7.23近辺でオープン。FRB高官から米利下げについて急がない旨のタカ派寄りな発言が相次いだことを受けて、先週の弱い米4月CPI後に下落した米金利が反発しドル高地合い。USDCNYは値幅は限定的ながら底堅い動きとなり7.24台半ばまで小幅に上昇した。

27日、7.24付近でオープン。PBOC基準値の緩やかな元安設定や米金利の上昇がドル高人民元安要因となる一方で、7.25を手前にして上に抜けづらい状況下、29日は7.2495でクローズ。

■ 今月の見通し

USDCNYは高値圏での推移継続を予想。

米国では予想を下回る経済データを受け、ドル安が進行する場面も見られたものの、Fed高官による利下げを急がない主旨の発言が続き、ドルは底堅い推移が継続している。マーケットの利下げ開始予想は、年初には2024年6月頃であったものの、足元12月まで後退している。6/11-12に控えるFOMCにおいて更新されるドットチャートは上方修正される可能性が高いと考えられ、経済データ次第ではあるものの、引き続き現在の金利水準の維持が続き、USDCNYも高止まりすると予想する。

他方、中国国内では、PBOC基準値が足元で7.11付近の水準での設定されている。直近安値水準である3月13日の7.0930からは元安水準となっており、現在の設定レンジが継続した場合、2%の上限についても徐々に元安サイドに切り上がることによって、実勢相場も7.30に向けて上昇していく可能性には警戒しておきたい。

その他、国内経済指標はまちまちの結果ながら、不動産以外は前年比を上回る結果となっており緩やかな回復が見られている。不動産市場は依然前年比割れの推移が続いているものの、5月に当局から発表された過剰在庫解消や住宅購入時の頭金に関わる支援はマーケットでは好感され、元高に推移する場面が見られた。

経常収支の観点でも、労働節に外国人旅行者が増加し、サービス赤字の拡大要因となった一方で、貿易黒字による実需の人民元買いはドル安元高要因として認識したい。また、不確定要因として米国大統領選挙や中米関係を巡るヘッドラインには引き続き警戒したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の有名な調味料』

中国の調味料は日本でもお馴染みのものが多いかと思います。八角や豆板醤のような日本でもメジャーなものも中国でもよく登場しています。

味覚を表現する言葉として「麻辣」という言葉が使われますが、痺れるような辛さを「麻(マー)」、ピリピリした辛さを「辣(ラー)」で表します。

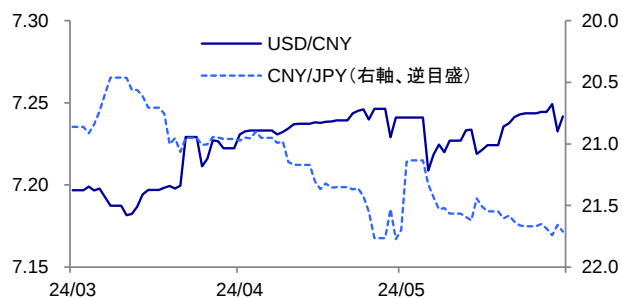
代表的な「麻」は花椒と呼ばれる香辛料で、山椒の実が使われており、独特の香りとピリッとした刺激が病みつきになる食材です。日本にいた時は、ウナギを食べる時以外で山椒を使うことはなかったのですが、当地ではいろいろな料理に花椒が使われており、痺れる感じが癖になって、上海に来てから「麻」の感覚が好きになりました。

一方で、「辣」と言えば唐辛子ですが、Wikipediaによると、「トウガラシ属は中南米が原産地であり、メキシコでの歴史は紀元前6000年に遡るほど非常に古い」との記載があります。中国では17世紀前後に伝来されたものの、そのルートについては不明点が多いそうです。

いずれにしても現在は多く普及している唐辛子。代表的な四川料理に麻婆豆腐がありますが、中国の麻婆豆腐は「麻辣」双方の刺激がかなり強く、「辣」だけが強い日本の麻婆豆腐は、中国人曰く、とてもマズイ料理だそうです…。

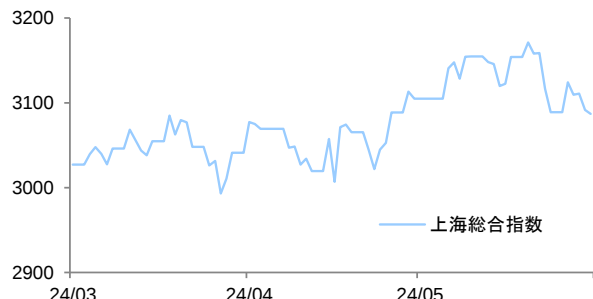
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/30	財新製造業PMI	4月	51.0	51.4	51.1
5/6	財新非製造業PMI	4月	52.5	52.5	52.7
5/9	貿易収支	4月	\$81.00b	\$72.35b	\$58.55b
5/11	PPI(前年比)	4月	-2.3%	-2.5%	-2.8%
5/11	CPI(前年比)	4月	0.2%	0.3%	0.1%
5/15	MLF	-	2.50%	2.50%	2.50%
5/17	鉱工業生産(年初来/前年比)	4月	5.9%	6.3%	6.1%
5/17	小売売上高(年初来/前年比)	4月	4.6%	4.1%	4.7%
5/17	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	4月	4.6%	4.2%	4.5%
5/20	LPR1年物	-	3.45%	3.45%	3.45%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3400 ~ 1.3800
SGD/JPY 112.00 ~ 118.50

アジア・オセアニア資金部 松本 彩花

■ 先月の為替相場

先月はSGD高が進行。

月初1日、USD/SGDは1.36台半ばでオープン。レイバーデーにてシンガポールを含む大半のアジア市場が休場となりアジア時間は動意に乏しい展開。一方で、海外時間においては注目のFOMCが開催され政策金利据え置きとなったものの、パウエル議長より利上げの可能性は低いとの見解が示唆されたことでFRBのタカ派傾斜への懸念が和らぎドルが売られる展開に。USD/SGDも取引終盤にかけて1.36付近まで下落する展開となった。その後も米金利低下基調や、3日発表の米4月雇用統計において非農業部門雇用者数や平均時給が市場予想対比弱い結果となったことでドルの軟調推移が継続。3日にUSD/SGDは一時1.34台半ばまで下落した。

7日、カシュカリ・ミネアポリス連銀総裁による現行政策金利水準が長期間据え置きとなる可能性が高いとの発言を受け米利下げ観測が後退し、米金利が反転上昇。ドル安の流れも一服となり、USD/SGDは9日1.35台半ばまで持ち直した。月半ばにかけては新規材料待ちの状況につき小幅な値動きとなったものの、15日海外時間にて発表された米4月CPIにてインフレの鈍化が確認されると、再びドル売り優勢の地合いとなり、USD/SGDは16日に一時1.34台前半まで下落した。

その後は複数のFRB高官による金融政策に対する強弱入り混じる発言を受けUSD/SGDは1.34台後半で一進一退の値動きとなったが、22日に公表されたFOMC議事要旨より「様々な参加者が必要なら追加引き締めに前向き」とのタカ派寄りの内容が示されるとドル買いの流れに。好調な米経済指標の結果も相俟って、24日にUSD/SGDは1.35台を回復。尚、同日シンガポールの4月CPIが発表され、前年比2.7%と市場予想通りの結果となったが、相場への影響は限定的であった。月末にかけてもドルが堅調な流れは続き、USD/SGDも1.35台前半を中心に少しずつ水準を切り上げる値動きとなった。

■ 今月の見通し

今月のUSD/SGD相場は引き続き底堅い推移を予想。

先月のUSD/SGDは強弱入り混じる米経済指標や、一部FRB高官より従前と比較するとややハト派と受け止められるような発言があったことを背景に対USDでSGDが上昇した。前月発表の米雇用関連指標は非農業部門雇用者数や平均時給が市場予想対比弱い結果となり、米4月CPIは前年比+3.4%と前回対比インフレの鈍化が確認出来ている状況。今月もFOMCを控えているが、米4月CPI公表後以降も利下げについては慎重対応すべきとのFRB高官発言が目立っていることを勘案するとイベントを無難に通過するものと想定する。一部の軟調な米経済指標や一部のFRB高官によるハト派的な発言を元にドル安方向への転換点と判断するには時期尚早であり、今月もドルが堅調な地合いは継続するものと見込む。

一方で、シンガポールにおいては4月総合CPIが前年比+2.7%、コアCPIが前年比+3.1%と総合指数・コア指数ともに前回対比横ばいの結果となった。MASは今後の物価について、輸入及び国内コスト圧力の弱まりを受け今年後半低下するとの見通しを示しているが、他アジア諸国においても食品・エネルギー価格上昇を背景としたインフレ再燃リスクを抱えている中で今後順調にCPIの鈍化が確認できるかどうかについては注視が必要と考える。尚、引き続きMASからは「現在の金融政策設定は中期的な物価安定を確保するのに十分」との情報発信がされており、次回7月会合での政策変更の可能性は高くないと考えられるが、USD/SGD相場においては上述の通りドル安方向へ強い流れを作るような材料は足元特段見当たらないため引き続き底堅い推移を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の有名な調味料』

まずは、シンガポールの名物でもあります『カヤ・ジャム』です。当地で朝食の定番として有名な「カヤ・トースト」に使われているジャムですが、ココナッツミルクを主な原料としていて、甘くてふわっとした味が特徴的です。色はやや黄色？っぽく、ペースト状のジャムとなっています。焼いたバンにバターなどと合わせて塗ると、おいしさ満点です。ちなみに「カヤ」はマレー語で「豊かな」「裕福な」という意味があるそうです。操業80年以上で日本にも進出している「Ya Kun Kaya Toast」というお店のものが有名です。また、同店舗のピスタチオクッキーなども軽いお土産に最適です。

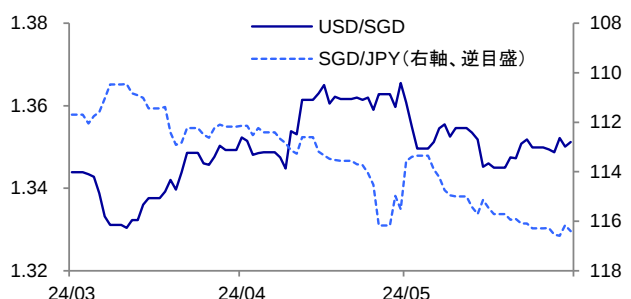
次に、シンガポールのローカルフードといえばチキンライスは有名ですが、在住者にはジンジャーチキンも人気があります。蒸し鶏に、ジンジャーソースをかけていただくのですが、このジンジャーソースが美味しいそうです。(私は未経験)老舗レストランの「Soup restrant」のジンジャーソースはスーパーでも販売していて、手軽に買えるようです。

シンガポールでは、大きく分けて中華系、マレー系、インド系の料理が豊富に揃っています。そのため、バラエティに富んだ調味料がスーパーなどで手に入れられます。

(アジア・オセアニア資金部 甲斐 貴之)

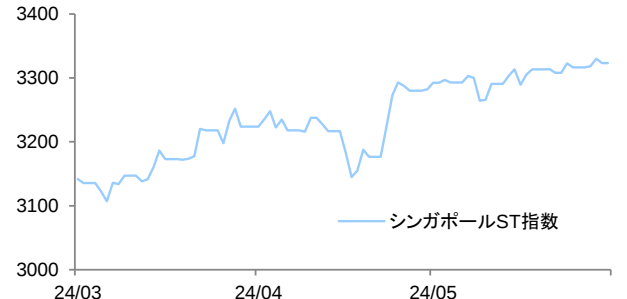
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/3	小売売上高(前年比)	3月	2.8%	2.7%	8.4%
5/17	非石油輸出(前年比)	4月	-8.9%	-9.3%	-20.7%
5/23	CPI(前年比)	4月	2.7%	2.7%	2.7%
5/24	鉱工業生産(前年比)	4月	-0.5%	-1.6%	-9.2%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 36.00 ~ 37.30
THB/JPY 4.20 ~ 4.30

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 鈴木 一勲

■ 先月の為替相場

5月は約2カ月ぶりのバーツ高水準をつけた後に下げ幅を縮小。月初はタイを含むアジア各国で休場となる中、37バーツ台前半で取引を開始。前日の米金利上昇によるドル買いの流れを継いで年初来高値を更新。早々に5月の月間高値も記録した。5月FOMCがややハト派的な内容で上下に振れた後は、36バーツ台後半へ下落。3日に発表された米4月雇用統計も弱めだったことで瞬間的に36バーツ台半ばへ下げたが、タイの連休前だったこともあって、終値としてはあまり変わらず。翌週、2024年のタイGDP予想値が下方修正されると、一時37バーツ台をつけるも、ドル高に対する調整で幅広くドルが下落する中、ドルバーツも36バーツ台後半でのレンジ推移となった。

中旬、注目度が高かった米4月CPIはヘッドラインが市場予想に届かず、米4月小売売上高も弱かったことでグローバルにドルが売られる展開。36バーツ台前半まで下げた後も数日間下落基調が継続した。悲観的な予想とは裏腹にタイ1QGDPが思いの外、前年同期比のマイナス幅が小さく、タイ経済の見通しに対する悲観的な見方が後退すると、下げ幅を拡大してドルバーツは一時35バーツ台をつけた。

下旬、起債アナウンス主導による米金利上昇やFRB高官のタカ派な発言がドルの買い戻しに作用して、36バーツ台前半を回復。5月FOMC議事要旨でも参加者が追加の引き締めに前向きである旨の内容が確認されると、36バーツ台半ばまで続伸した。タイ4月新車販売台数がコロナ感染者数のピークにあった2021年8月以来の低水準を記録したほか、強めの米経済指標による米金利上昇とタイ国内外でのドル高・バーツ安要因が影響して36バーツ台後半まで上昇。ただし、米期待インフレ率の下方修正もあり、更なる上値追いつきはならず、暫く36バーツ台半ばを中心に推移。月末近くには米利下げ観測の後退に米長期金利が追いつくように米10年債利回りが大きく上昇。ドル全面高となって36バーツ台後半へ中心レンジを切り上げた。

■ 今月の見通し

6月のドルバーツはタイ中銀のMPCと米FOMCという2つの重要イベントを控え、底堅い展開を予想。

5月はハト派寄りなFOMCに始まり、米雇用統計も弱めだったことで米金利が月央にかけて低下。これまで進んできたドル高の巻き戻しが進んだが、米金利の下げ止まりとFRB高官らのタカ派発言により、“より高く、より長く”のフリーズが再度意識され、米金利上昇と共に月末にかけてそれまでの下げ幅の大部分を取り戻している。

6月FOMCの結果が発表されるのはタイ中銀のMPCが開催される12日のタイ時間深夜ということもあり、タイ中銀が先んじて行動を起こす可能性は低く、現状維持が予想される中、MPCの相場へのインパクトは軽微と考える。タイの新車販売台数はパンデミック最悪期だった2021年夏以来の水準まで落ち込んでいて、タイ中銀としては国内経済の低迷を気にしているものの、利下げの先行は更なる通貨安を招く可能性があるため、仮に何かしたくても政策金利にはまだ触れないというのが実情であろう。

一方の米国においては、時折弱い米経済指標が続くと、利下げが意識されてドル売りとなるが、その後強めの経済指標やタカ派な高官発言を受けてドル高が盛り返すという状況が年始以降続いているような印象を受ける。その都度利下げ時期が後退していき、今では11月乃至は12月FOMCで利下げがあるかどうかというところまで後ずれしている。あと2週間もすれば、6月FOMCを迎え、ドットチャートの更新も行われる。直近の米経済指標からはインフレ面での進展にFRBメンバーが自信を深められているとは考えにくく、ドル安になるような結果とならないのではないかと。

加えて、人民元が対ドルで若干下落基調となっていることもタイバーツにとっては負の作用があるため、6月のドルバーツは底堅い推移になると見ています。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の有名な調味料』

タイで有名な調味料と言えば、大半の方がナンブラー(魚醤)を連想すると思います。タイの調味料知名度ではNo.1と言えるのではないのでしょうか。

但し、本欄で既に有名なナンブラーのことをお伝えするわけにもいかず、タイでは有名ですが、タイ国外では知る人が少なそうな調味料「タオチオ」を資金室のスタッフに教えてもらいました。

タオチオは大豆を塩漬けさせて発酵させたもので、大豆の粒がそのまま残っていることが特徴的なタイの人々にとって味噌のような存在の調味料だそうです。炒め物に良く使われると聞いており、個人的に好きな空心菜の炒め物に良く入っていることも教えてくれました。

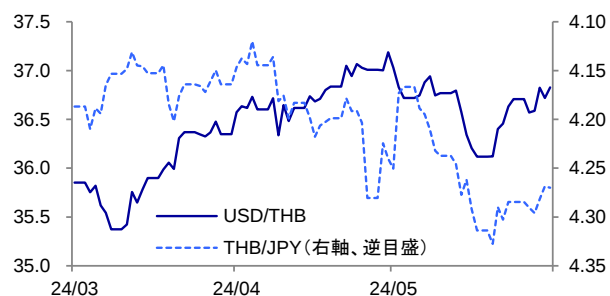
空心菜の炒め物は当地の他の派遣行員と外食するときもタイ式中華料理店ではほぼ必ずオーダーされると言っても過言ではない鉄板の一品ですので、味噌が好きな日本人の舌にもマッチすることは実証されているようなのだと思います。

この他、タイ版の食べるラー油のような位置づけにあると思われる、「ナムプリックパオ」もタイの人々にとっては有名だけど、国外では知られていないものだと思います。有名なタイ料理であるトムヤムクンにも使われているようで、辛みだけではなく、野菜や魚介のペーストから出る旨味とコクを料理に与えるローカルの間では人気の調味料です。

こうして調味料のことを書いているとその料理が頭に浮かんで来るので、お店に行って食べたくなってきました。近いうちに2つの調味料が使われた料理を堪能したいと思います。

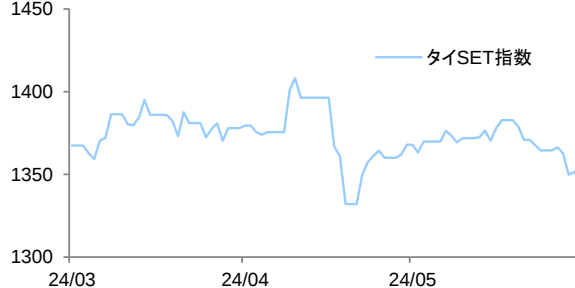
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/3	CPI YoY	4月	-0.20%	0.19%	-0.47%
5/3	CPIコアYoY	4月	0.34%	0.37%	0.37%
5/15	消費者信頼感指数	3月	-	56.0	56.9
5/20	GDP YoY	1Q	0.80%	1.50%	1.70%
5/23	自動車販売台数	4月	-	46,783	56,099
5/23	輸出(通関ベース)YoY	4月	-0.20%	6.80%	-10.87%
5/23	輸入(通関ベース)YoY	4月	5.00%	8.30%	5.63%
5/23	貿易収支(通関ベース)	4月	-\$2,600M	-\$1,642M	-\$1,163M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.64	～	4.75
	MYR/JPY	32.79	～	33.90
	JPY/MYR	2.95	～	3.05

マレーシアみずほ銀行 内田 星

■ 先月の為替相場

先月のリングgit相場は米FOMCと米経済指標を材料にドル金利が低下し、マレーシアリングgitは上昇した。

上旬は、中国の労働節、日本のGW連休もあり、アジア時間帯の取引参加者が少なく流動性が低い状況下、2日の米FOMC後にドル売りが加速した。パウエル議長は記者会見でインフレ目標2%に向けて進展が見られないとの認識を示した一方、市場ではタカ派のトーンダウンと捉えられたことや、量的引き締めスピードを6月から減速させると発表したことでドル金利低下を招いたことが主因と見られる。また、時期を同じくして円買い介入による大口フローで円が急騰。翌2日のオンショア市場でUSD/MYRでリングgit買いが優勢。その後、9日にマレーシア中銀は6会合連続で政策金利3.0%への据え置きを発表。国内インフレが落ち着きを見せる中、馬中銀は現行金利水準が国内経済を支援するとの認識であり、今次据え置き判断も市場コンセンサス通りだった。

中旬にかけては、14日の米生産者物価、15日の米消費者物価が市場予想範囲内となった一方、米小売売上高が市場予想を下回った他、前月2か月の伸び率が下方修正されたことが嫌気され、ドル金利低下でドル安が進行。また17日発表の第一四半期GDPは民間消費の増加と輸出の底打ちが支援となり4月発表値+3.9%を上回る+4.2%に成長率が加速。今後の国内経済を見通す上で明るい材料となった。また海外投資家によるMYR買いフローが断続的に入ったこともリングgit上昇の一要因とみられた。

下旬はタカ派と捉えられたFOMC議事要旨でドル上昇。20日発表の4月貿易統計は輸出入共に市場予想を下回る内容だったものの、輸出が3か月ぶりのプラス転となったことでリングgitは発表後も堅調に推移。23日ウェサックデー祝日を挟んで米FOMC議事要旨でUSD/MYRは大幅上昇。全会一致の金利据置きだった一方で複数メンバーが現在の政策金利がインフレ2%到達に向けて十分抑制的ではないとの見解を述べていたことがドル買いを誘った。また24日発表の4月消費者物価ではヘッドラインが+1.8%で市場予想を下回る伸び。現時点では引き続き国内インフレ上昇が限定的であることが確認された。

■ 今月の見通し

今月は13日に米FOMC、14日に日銀政策会合の開催が予定されており、引き続きマレーシア国外市場を見ながらの相場展開となりそうだ。

13日の米FOMCでは委員会メンバーによるFF金利見通し(所謂ドットチャート)が併せて公表される予定。前回3月時点での24年内利下げ見通しは中央値で3回。その後に足許までに発表された米経済指標を考慮すると更なる利下げ回数の減少と開始時期の後ずれ可能性が期待されており、市場参加者の関心は13日早朝に集まる。前回5月FOMCではパウエル議長が利上げ可能性は限定的との認識を示し市場では安心感を誘ったが、今会合で利上げを仄めかす発言が出てくる可能性も否定できないと考えている。そうすると市場は一気にタカ派容認でドル買いへ進展する可能性もあることから注視したい。現在市場では、24年11月乃至は12月に1回の利下げがコンセンサスとなっており、米大統領選との時期とも重なることから、24年下半年のドル相場は波乱の展開となりそうだ。

また14日の日銀政策会合では、日銀が市場に対して着々と利上げに向けた道筋を付けて来おり、現時点で今会合での利上げはメインシナリオではないものの、発表後の植田総裁の発言には注目したい。特に円安進行に伴う物価への影響に対し、市場では植田総裁のスタンス変化に注目している。今次記者会見でも注目度は高く、記者による質疑応答で取り上げられる可能性は相応に高いとみている。

最後に国内経済だが、先月発表された第1四半期GDP、4月貿易統計並びに消費者物価は、今後の国内経済の成長拡大を期待する内容だった。国内インフレについても現時点では十分に制御された水準で推移しており、明るい材料と言えそうだ。更に実需筋のリングgit買いフローの回帰が本格化するようであれば、リングgitにとって支援材料となりそうだ。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

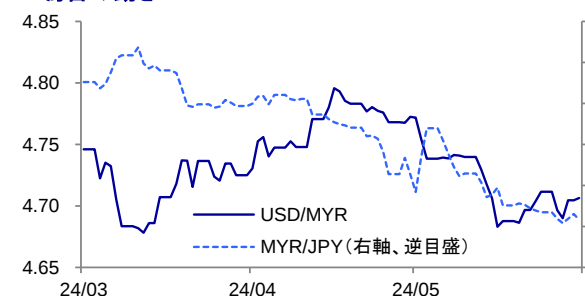
『当地の有名な調味料』

マレーシアの代表的な調味料として、今回はサンバルとグラマラッカを紹介したいと思います。サンバルは、マレーっ子の日常の味として知られるナシレマにかかっているソースの他、ナシゴレンをはじめとしたあらゆるマレー料理の隠し味として加えられる万能調味料です。唐辛子のピリ辛が特徴的で辛味の中にも深いコクがクセになります。特にバナナの皮で三角形に包まれているナシレマは、朝ごはんの定番として食べられていますが、このサンバルの辛味は朝からでも楽しめる味わいです。サンバルソースについてネットで調べてみると、ソースの原料は、唐辛子の他に玉ねぎ、にんにく、砂糖が入っている様です。口に入れると辛味の中から徐々に広がる甘味のようなうまみは玉ねぎだったんですね。私もマレーシア赴任当初は、朝一からソースをたっぷりかけて食べるローカルの姿を見て驚きましたが、今ではすっかりサンバルソースなしにナシレマは成立しえない程のサンバルソースLoverになっています。

一方のグラマラッカですが、名前の通りマラッカ地方の伝統的な黒糖です。サトウキビではなく、椰子の樹液を原料としており、チェンドルなどのマレーシアスイーツではよく見かけるソースです。マレーシアのスイーツでは色々な所でココナッツミルクも使われていますが、このグラマラッカとココナッツミルクの相性は最高です。ピリ辛のサンバルソースを食した後に食後のデザートとしてグラマラッカがたっぷりかかった冷たいチェンドルを食べれば、辛さで火照った口の中をグラマラッカの甘いソースが癒してくれます。是非、お試しあれ！！

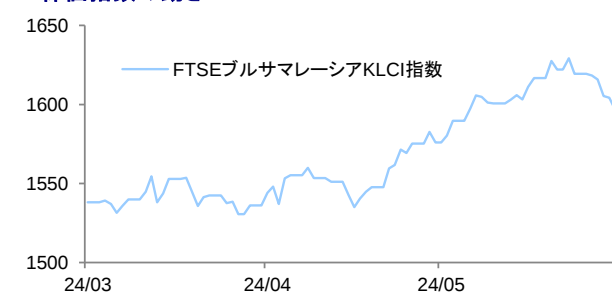
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/8	Foreign Reserves	Apr 30	-	\$112.8b	\$113.4b
5/9	BNM Overnight Policy Rate	May 9	3.0%	3.0%	3.0%
5/10	Industrial Products YoY	Mar	1.9%	2.4%	3.1%
5/17	GDP YoY	1Q	3.9%	4.2%	3.9%
5/17	GDP SA QoQ	1Q	1.9%	1.4%	-2.1%
5/20	Exports YoY	Apr	14.1%	9.1%	-0.8%
5/20	Imports YoY	Apr	17.8%	15.6%	12.5%
5/20	Trade Balance MYR	Apr	11.80b	7.70b	12.81b
5/24	CPI YoY	Apr	1.9%	1.8%	1.8%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR	15900	～	16350
IDR/JPY	0.9524	～	0.9901
JPY/IDR	101.00	～	105.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 綱島 正侑記

■ 先月の為替相場

5月のルピアは上昇後反落し往って来い。月初2日のルピアは前日海外時間に行われたFOMC会合の結果を受け前営業日対比ルピア高水準となる16200台前半で取引を開始した。同日発表されたインドネシア4月消費者物価指数(CPI)の結果は市場予想対比小幅に下回る結果となった一方、コアCPIは予想を上回る結果となり市場の反応は限定的。海外時間に入り米金利が低下したこと受け再度ドル安の流れが強まると、3日のドルルピアは16000台前半までルピア高が進展した。3日海外時間に発表された米4月雇用統計の結果が市場予想を下回る結果となったことを受け、6日のドルルピアは一時15900台後半までドル安が進展。しかしながら同水準ではドル買い意欲も見られじりじりと値を戻す展開。13日、海外時間に発表された米4月NY連銀1年先インフレ期待が約5か月ぶりの高水準となったこともドル買いの追い風となり、ドルルピアは14日には16100台前半までルピア安が進展した。しかしその後は15日海外時間に発表された米4月CPIの結果が前月から伸び率が低下したこと受けドル売りが優勢となると、ドルルピアは16日には月中心安値となる15900台前半を付けた。20日、発表されたインドネシア1～3月期経常収支の結果は事前予想を下回る結果となり、2023年10～12月期から経常赤字が拡大となったが、市場の反応は限定的となり15900台半ばから後半にかけて水準での値動きが継続した。22日に開催されたインドネシア中銀会合では事前の予想通り政策金利の据え置きが決定されたが市場の反応は限定的。その後は月末が近づき、実需のルピア売り圧力が強まる中、ルピアはじりじりと下落幅を拡大させ、30日には16100台半ばまで下落幅を拡大させた。

■ 今月の見通し

6月のルピアは底堅い値動きを予想。引き続き米国要因に振られる展開が継続している中ではあるが、インドネシア中銀が4月会合時に示した「2024年第2四半期はドルルピアは平均して16200近辺で安定的に推移する」との見方に沿った水準での値動きが継続している。インドネシア中銀は5月会合においてルピアは安定的に推移するとの見方を示しつつも、為替介入を通じ通貨の安定を図る姿勢を維持しており、引き続き過度なルピア安は容認しないものと考えられる。5月末にかけては実需のルピア売り圧力の高まりを受け再度16200台までルピア安が進行したが、4月中下旬に付けた16200台後半の水準ではルピアは下げ渋っており、目先のルピア安値目途としては16300近辺が意識されやすいか。今後、更なる米国の利下げ期待の後退等によりドル高が進む局面においては、為替介入によりルピアの安定を図るものと考えられるが、16300を明確に上抜ける局面ではインドネシア中銀による追加利上げの可能性も否定できないだろう。引き続きドルの動向に左右されやすい環境が継続するとは考えられるが、通貨の安定を優先するインドネシア中銀の姿勢を踏まえればルピアの下落余地は限定的であると考えられ、ルピアは底堅く推移するものと予想。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

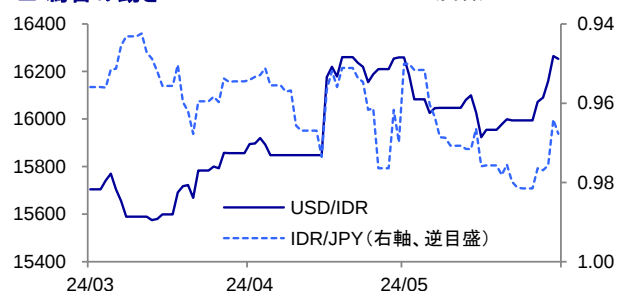
『当地の有名な調味料』

ケチャップ・マニスは、当地の料理には欠かす事のできない代表的・基本的な調味料の一つ。「ケチャップ」と聞くと、トマトを使った赤い物を思い浮かべますが、それとはまったく別モノ。ケチャップはインドネシア語でソース全般を指し、マニスは「甘い」という意味を持ち、添加するパームシュガー由来の特有の甘みがある。醤油と比較すると、ややとろみがあり、味ははるかに甘い。茹でた黒大豆、焙煎した穀物、塩、水、発酵ペーストにパームシュガーを加えて作られる。強い甘味は、たっぷりのパームシュガーによるもので、最大 50 パーセント含まれることもある。また、シナモン、黒コショウ、コリアンダー、クローブなどのスパイスが加えられることが多い。ナシ・ゴレンやミー・ゴレンなどの加熱調理のほか、卓上で料理にかけるソースとしても用いられる。焼き鳥のソース、ソトヤトンセンのようなスープ類、炒め物の調味にも使われる。特にスムール(当地風ビーフシチュー)にはケチャップマニスが欠かせないとされる。

(インドネシアみずほ銀行 アストリッド)

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/2	CPI(前年同月比)	4月	3.10%	3.00%	3.05%
5/6	GDP(前年比)	Q1	5.08%	5.11%	5.04%
5/15	貿易収支(USD M)	4月	3,100	3,559	4,578
5/15	輸出(前年比)	4月	4.36%	1.72%	-4.19%
5/15	輸入(前年比)	4月	8.69%	4.62%	-12.76%
5/22	BI金利	-	6.25%	6.25%	6.25%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 57.00 ~ 59.50
JPY/PHP 0.360 ~ 0.385

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 福田 俊輔

■ 先月の為替相場

【5月のドルペソ相場は、右往左往しながら年初来のペソ安値を更新】

月初は、1米ドル＝57ペソ台後半でドルペソ相場は開始。月初週は、米4月雇用統計が予想比で冴えない結果だった為、米長期金利が大きく低下で反応。これを機にグローバルなドル買いの流れが反転、フィリピンペソも同調し、1米ドル＝57ペソ台前半まで低下した。7日以降は、フィリピンの主要経済指標（物価、貿易、外貨準備、失業率、GDP）が断続的に公表されたが、総じて見ると堅調な経済成長のペースを保っている事が確認されると、1米ドル＝57ペソ台前半で堅調に推移。

中旬に入ってから、ドル買い戻しの動きとなり、1米ドル＝57ペソ台前半の値動きからレンジを上げて57ペソ台後半に戻した。勢いに乗って心理的な節目となる58ペソを試す動きも見られたが、上値警戒感から揉み合った後、反落。その後は、16日のフィリピン中銀による金融政策決定会合を控えて、57ペソ台前半まで戻し、右往左往。結局、市場参加者の予想通り、政策金利は据え置きとなったが、注目を集めたのは、レモロナ・比中銀総裁のコメント。従来のタカ派的なトーンから一転、2024年内に最大▲0.50%の利下げをすることも可能性として議論していることが示されると、再びペソ安に向かう流れを引き起こした。

下旬に入ると、上記発言を受け、1米ドル＝57ペソ台後半へ。過去何度か直前まで迫るも折り返していた、1米ドル＝58ペソを22日に突破。抵抗線だと思われた水準も今回はあっさりと越えてきた後は58ペソ台前半で揉みあう。終盤は、米長期金利の動向を横目に見ながらの展開となったが、年初来のドル高ペソ安を更新し、1米ドル＝58ペソ台後半まで上昇して、5月を終えた。

■ 今月の見通し

【6月のドルペソ相場は、上値を模索する展開が継続と見る】

5月は、これまでのドル一強の流れが幾分調整されたかに見えたが、一旦ドル売りの調整が底を打った後、再びドル買い戻しが入っている。その過程の中でドルペソ相場はレンジを一段引き上げ、1米ドル＝58ペソ台に乗せ、年初来のドル高ペソ安水準を断続的に更新した。心理的節目だと思われていた、1米ドル＝57ペソを4月に、次なる節目の1米ドル＝58ペソを5月に更新している。

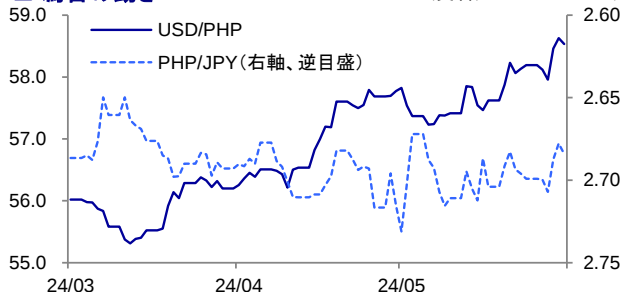
足許の水準は、2022年の11月以来、約1年6か月ぶり。2022年当時は、結局1米ドル＝59ペソ台前半で最終的に折り返したが、現状ペソ高に向かう材料に乏しい。

比中銀から幾つか出てきたコメントの中には、「為替市場の過度な変動に対しては、必要に応じて対処する用意がある」として、市場を牽制する動きも見せている。一方で、フィリピンの政策金利を2024年内にも利下げも視野に議論、早ければ8月にも可能性がある事を示唆しており、ペソ安材料と取られかねないコメントも残している。景気浮揚とインフレ抑制の難しい舵取りが比中銀に求められている。

5月終盤のペソ安に対しても、比中銀はやや静観。このペースでいけば59ペソ台に乗せてくることも視野に入ってくる。米経済指標の結果や米長期金利動向に一喜一憂しながらも、グローバルなドルの強弱にペソは引っ張られる展開が続くことが予想される。ドルペソは、次なる抵抗線を模索する動きとなろうが、中銀のアクションが上値を押さえる程度にとどまるのか、レンジを大きく変えてくるような大胆な行動に出てくるのか。6月中旬のFOMCおよび、同会合で更新されるドットチャートが出てくる前後に、ペソ安の流れに変化が起こるかが注目である。

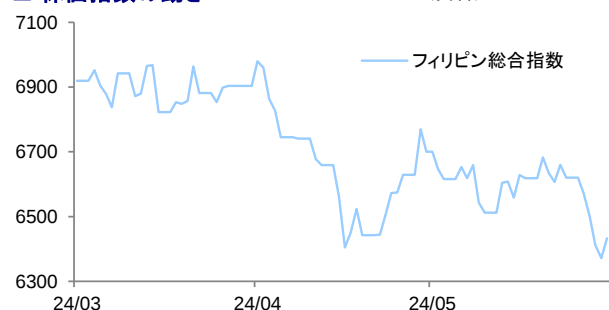
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間 予想 結果 前回

インドルピー相場

予想レンジ:

USD/INR 82.80 ~ 83.70
INR/JPY 1.83 ~ 1.96

アジア・オセアニア資金部 インド室 綿引 修平

■ 先月の為替相場

【5月の米ドル/インドルピーは小幅なルピー高も、節目83水準を前に底堅い】

83台半ば付近にて当月取引を開始。月初については、USD高圧力の高まりに連れて、再び83台半ばを超えるルピー安の展開を見せる。一方、当該水準からは大口の実需勢からのフローやインド準備銀行(RBI)からの上値抑えの為替介入(USD売り・INR買い)も散見され、過度なルピー安の方向感には引き続き至らず、水準感を取り戻す。月央については、上値の重い展開が継続し、値幅に乏しい時間帯となるも、月末にかけてはじり高の様相となり、一時的に節目の83水準目前までルピー高の流れに。その後、RBIからの下支えの為替介入(USD買い・INR売り)の動きも一部発動された模様で、節目水準を目前に総じて底堅い値動きに転じつつ小幅に反発し、結局、83.10台前半水準にてクローズとなった(27日時点)。

SENSEXは、月初はモディ政権再任に対する期待感も相俟ってか、75,000水準を一時超える動きで、年初来高値を視界に捉える動き。その後は、利益確定売りの様相が強く、一時72,000水準を割り込む局面まで下落する展開となるも、当該水準では下値の底堅さも感じさせつつ、反発して上昇基調を辿る展開。月末にかけて、再び年初来高値を更新する勢いを見せた。外国人投資家からのインド株への投資資金流入は、5月単体では利益確定の様相が強く売り越し優勢となっているものの、月央からは買い越し圧力も高まってきており、総じて大きく売り込まれてはいない状況。

インド経済指標では、4月製造業/サービス業PMIは前回対比で小幅に低下。4月消費者物価指数(CPI、前年比)は+4.83%と、前回の+4.85%から若干低下し、引き続き落ち着いている状況。4月貿易収支は、赤字幅が拡大し赤字常態化は継続、通貨として売られやすい立ち位置は不変のまま。

■ 今月の見通し

【6月の米ドル/インドルピーは節目83水準で底堅く高値圏揉み合いか】

6月においては、節目83水準にて、底堅く高値圏での揉み合いを見込む。5月は、83台半ばを超える値動きを見せるも、実需勢のフローが奏功し、上値の重い展開。一方、引き続き節目83水準目前ではRBIからの下支えの為替介入により反発しており、過度なルピー高への警戒感も伴いつつ、抑制姿勢は引き続きしっかり確認出来ている状況。かかる中、RBIからのアンダーコントロールが継続する前提は崩さず、目線感としての安定推移路線を主軸に、節目水準を超えて底堅く推移する想定。

4月CPIは、前回対比で小幅に低下する結果に。4月金融政策委員会(MPC)では、政策スタンス(インフレ退治に向けた利上げ路線継続)は不変のままを維持し、引き続きインフレへの警戒態勢は崩していない状況。足許はインフレターゲットである+4.0%への到達に向けた道程を確認していくフェーズとなるも、2月会合時と同様に、反対票(利下げ票)は入っている状況下、RBIとしての利下げ局面入りが年後半にかけて視野に入ってくる可能性も。

5月は、インド株・インド債券への投資資金流入については、利益確定売りの様相もあり売り越しとなるも、月央からは買い越し圧力に転じており、総じて底堅さは不変。米利下げ局面入りにて年後半にかけてルピー高の流れが顕在化するといったメインシナリオは未だ変えていないものの、総じてUSD売り圧力の勢いが加速するには至らず、むしろRBIからの下支えの為替介入および実需勢からのアウトフロー(インドルピー売り)を伴って、ルピー安回復という方向感を崩していない。一方、米インフレ動向次第にて再度の利上げ観測が高まってくる場合は、今年のメインテーマが大きく変貌する(加速度的なUSD買い圧力)可能性を警戒しつつ、年末にかけて米大統領選挙含めた重要イベントが重なり合うことで、年後半でのボラティリティーの高まりにも留意しておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の有名な調味料』

インドは皆さんご存じの通り、スパイス大国です。インド料理にスパイスは欠かせません。スーパーなどに行くと本当にたくさんの種類のスパイスを目にします。

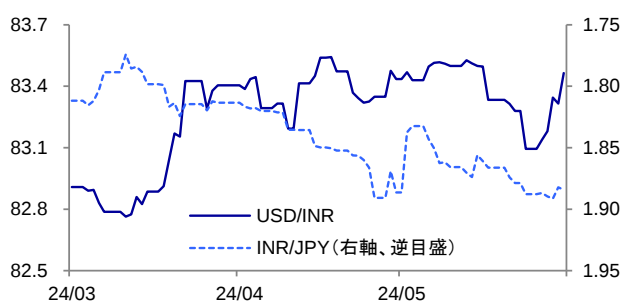
代表的なものといえばやはりガラムマサラではないでしょうか。シナモン、クローブ、カルダモン、コリアンダーなどの数種類から10種類くらいのスパイスがブレンドされており、その風味はものにより異なります。インド料理は食べる専門なので作ることにしましてはあまりわからないのですが、スーパーなどに行くと色々なブランドのガラムマサラがあり、EverestやTATA、MDHなど有名どころのような気がします。

インドのスーパーのスパイスコーナーは本当にたくさんのスパイスが陳列されており、インド料理を作らない私でも見るだけで楽しく、またお土産にも喜ばれそうなのでぜひ見てみてください！

(インド営業部ニューデリー 七戸)

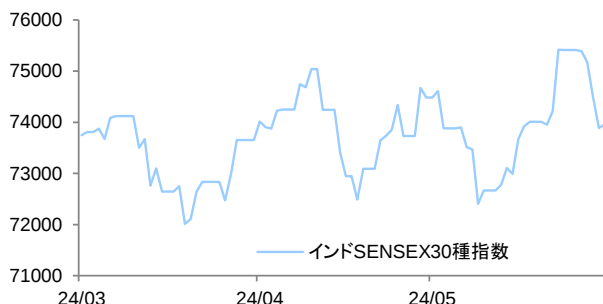
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
5/2	製造業PMI
5/6	サービス業PMI
5/10	鉱工業生産
5/13	CPI
5/15	貿易収支(百万ドル)

(資料) ブルームバーク

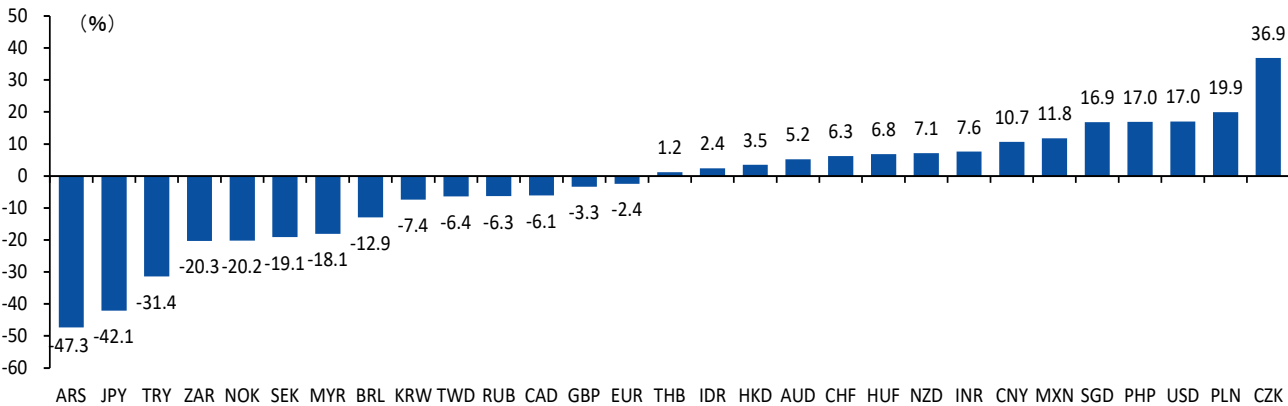
期間	予想	結果	前回
4月	-	58.8	59.1
4月	-	60.8	61.2
3月	5.20%	4.90%	5.60%
4月	4.80%	4.83%	4.85%
4月	-17,300	-19,103	-15,598

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2023年末	2024年5月末	騰落率	株式市場	2023年末	2024年5月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	37689.54	38686.32	2.6%	-
日本	USD/JPY	141.04	157.31	11.5%	日経平均株価	33464.17	38487.9	15.0%	3.1%
ユーロ圏	EUR/USD	1.1039	1.0848	-1.7%	ドイツDAX指数	16751.64	18497.94	10.4%	10.4%
英国	GBP/USD	1.2731	1.2742	0.1%	ロンドンFTSE100指数	7733.24	8275.38	7.0%	6.9%
豪州	AUD/USD	0.6812	0.6653	-2.3%	S&P/ASX200指数	7590.818	7701.739	1.5%	3.9%
カナダ	USD/CAD	1.3243	1.3628	2.9%	S&PTロント総合指数	20958.44	22269.12	6.3%	3.3%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	7.1	7.2418	2.0%	上海総合	2974.935	3086.813	3.8%	1.7%
香港	USD/HKD	7.8115	7.8197	0.1%	香港ハンセン	17047.39	18079.61	6.1%	5.9%
インド	USD/INR	83.2088	83.465	0.3%	インドSENSEX30種	72240.26	73961.31	2.4%	2.1%
インドネシア	USD/IDR	15399	16253	5.5%	ジャカルタ総合	7272.797	6970.736	-4.2%	-9.2%
韓国	USD/KRW	1291.07	1385.61	7.3%	韓国総合株価	2655.28	2636.52	-0.7%	-7.5%
マレーシア	USD/MYR	4.594	4.7065	2.4%	ブルサマレーシアKLCI	1454.66	1596.68	9.8%	7.1%
フィリピン	USD/PHP	55.385	58.532	5.7%	フィリピン総合	6450.04	6433.1	-0.3%	-5.6%
シンガポール	USD/SGD	1.3203	1.3512	2.3%	シンガポールST	3240.27	3336.59	3.0%	0.6%
台湾	USD/TWD	30.579	32.469	6.2%	台湾加権	17930.81	21174.22	18.1%	11.2%
タイ	USD/THB	34.256	36.828	7.5%	タイSET	1415.85	1345.66	-5.0%	-11.6%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2024年4月時点)



■ 実質GDP成長率

	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2023Q3	2023Q4	2024Q1	2022	2023
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.7	2.6	2.2	2.1	4.9	3.4	1.3	1.9	2.5
日本*	-0.9	1.3	4.8	4.1	-3.6	0.0	-2.0	1.0	1.9
ユーロ圏	2.5	1.9	1.3	0.6	0.1	0.1	0.4	3.4	0.4
英国	2.1	0.6	0.3	0.2	0.2	-0.2	0.2	4.3	0.1
豪州	5.8	2.4	2.5	2.1	2.1	1.5		3.8	2.1
カナダ*	1.8	-0.9	3.4	0.7	-0.3	0.1	1.7	3.8	1.1
エマーGINGアジア									
中国	3.9	2.9	4.5	6.3	4.9	5.2	5.3	3.0	5.2
香港	-4.6	-4.3	2.8	1.6	4.2	4.3	2.7	-3.7	3.3
インド	5.5	4.3	6.2	8.2	8.1	8.6	7.8	9.7	7.0
インドネシア	5.7	5.0	5.0	5.2	4.9	5.0	5.1	5.3	5.1
韓国	3.2	1.4	0.9	0.9	1.4	2.2	3.4	2.6	1.4
マレーシア	14.4	7.4	5.5	2.8	3.1	2.9	4.2	8.7	3.7
フィリピン	7.7	7.1	5.7	4.3	6.0	5.5	5.7	7.6	5.6
シンガポール	4.2	2.4	0.5	0.5	1.0	2.2	2.7	3.9	1.1
台湾	4.0	-0.7	-3.5	1.4	2.2	4.8	6.6	2.6	1.3
タイ	4.4	1.3	2.6	1.8	1.4	1.7	1.5	2.5	1.9

(注)インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	23/09	23/10	23/11	23/12	24/01	24/02	24/03	24/04	2022	2023
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.8	3.8	3.7	3.7	3.7	3.9	3.8	3.9	3.6	3.6
日本	2.6	2.5	2.5	2.5	2.4	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6
ユーロ圏	6.6	6.6	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.4	6.8	6.6
英国	4.1	4.0	3.9	3.8	4.0	4.2	4.3		3.9	4.0
豪州	3.6	3.8	3.9	4.0	4.1	3.7	3.9	4.1	3.7	3.7
カナダ	5.6	5.7	5.8	5.8	5.7	5.8	6.1	6.1	5.3	5.4
エマージングアジア										
中国										
香港	2.8	2.9	2.9	2.9	2.9	2.9	3.0	3.0	4.3	3.0
インドネシア									5.9	5.4
韓国	2.6	2.5	2.8	3.2	3.0	2.6	2.8	2.8	2.9	2.7
マレーシア	3.4	3.4	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3		3.8	3.4
フィリピン	4.5	4.2	3.6	3.1	4.5	3.5	3.9		5.4	4.4
シンガポール	2.1	2.1	2.0	1.8	1.9	2.0	2.0	2.1	2.1	1.9
台湾	3.5	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.7	3.5
タイ	1.0			0.8					1.3	

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	23/08	23/09	23/10	23/11	23/12	24/01	24/02	24/03	24/04	2022	2023
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	3.7	3.7	3.2	3.1	3.4	3.1	3.2	3.5	3.4	8.0	4.1
日本	3.2	3.0	3.3	2.8	2.6	2.2	2.8	2.7	2.5	2.5	3.3
ユーロ圏	5.2	4.3	2.9	2.4	2.9	2.8	2.6	2.4	2.4	8.4	5.5
英国	6.7	6.7	4.6	3.9	4.0	4.0	3.4	3.2	2.3	9.1	7.3
豪州		5.4			4.1			3.6		6.6	5.6
カナダ	4.0	3.8	3.1	3.1	3.4	2.9	2.8	2.9	2.7	6.8	3.9
エマージングアジア											
中国	0.1	0.0	-0.2	-0.5	-0.3	-0.8	0.7	0.1	0.3	2.0	0.2
香港	1.8	2.0	2.7	2.6	2.4	1.7	2.1	2.0	1.1	1.9	2.1
インド	6.8	5.0	4.9	5.6	5.7	5.1	5.1	4.9	4.8	6.7	5.7
インドネシア	3.3	2.3	2.6	2.9	2.6	2.6	2.8	3.1	3.0	4.2	3.7
韓国	3.4	3.7	3.8	3.3	3.2	2.8	3.1	3.1	2.9	5.1	3.6
マレーシア	2.0	1.9	1.8	1.5	1.5	1.5	1.8	1.8	1.8	3.4	2.5
フィリピン	5.3	6.1	4.9	4.1	3.9	2.8	3.4	3.7	3.8	5.8	6.0
シンガポール	4.0	4.1	4.7	3.6	3.7	2.9	3.4	2.7	2.7	6.1	4.8
台湾	2.5	2.9	3.0	2.9	2.7	1.8	3.1	2.2	2.0	3.0	2.5
タイ	0.9	0.3	-0.3	-0.4	-0.8	-1.1	-0.8	-0.5	0.2	6.1	1.3

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2023Q3	2023Q4	2024Q1	2022	2023
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.8	-3.7	-3.4	-3.2	-3.0	-2.9		-3.8	-3.0
日本	2.3	2.0	1.6	2.1	3.1	3.6	4.2	2.0	3.6
ユーロ圏	-0.2	-0.6	-0.4	0.2	1.1	1.7		-0.6	1.7
英国	-3.2	-3.1	-2.1	-2.2	-2.4	-3.3		-3.1	-3.3
豪州	0.9	1.1	1.3	1.2	1.2	1.2		1.1	1.2
カナダ	-0.1	-0.4	-0.7	-1.0	-0.9	-0.6		-0.4	-0.7
エマーGINGアジア									
中国	2.6	2.6	2.4	2.3	1.8	1.5	1.2	2.5	
香港	11.4	10.2	9.0	9.4	8.8	9.2		10.2	9.2
インド	-2.6	-2.4	-2.0	-1.7	-1.1	-0.9		-2.4	-0.9
インドネシア	0.9	1.1	1.2	0.6	0.2	-0.1	-0.5	1.0	-0.1
韓国	2.8	1.6	0.4	0.2	1.1	2.1		1.5	2.1
マレーシア	2.6	3.2	3.5	3.7	3.1	1.6	1.8	3.2	1.6
フィリピン	-5.9	-4.6	-4.4	-3.3	-2.4	-2.6		-4.4	-2.6
シンガポール	18.8	18.0	18.2	18.2	18.5	19.8	20.2	18.0	19.8
台湾	14.3	13.4	12.1	11.9	12.7	13.8	14.9	13.3	13.8
タイ	-3.7	-3.2	-2.1	-0.9	1.2	1.4		-3.2	1.4

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	5.25-5.50	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2023/7/26	+25bp	2024/5/1	現状維持
日本	当座預金残高の政策金利	0.00	引き締め: 2024/3/19	-0.10	2024/3/19	+10bp	2024/4/26	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	4.00	引き締め: 2022/7/21	-0.50	2023/9/14	+25bp	2024/4/11	現状維持
英国	バンク・レート	5.25	引き締め: 2021/12/16	0.10	2023/8/3	+25bp	2024/5/9	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	4.35	引き締め: 2022/5/3	0.10	2023/11/7	+25bp	2024/5/7	現状維持
カナダ	翌日物金利	5.00	引き締め: 2022/3/2	0.25	2023/7/12	+25bp	2024/4/10	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.45	緩和: 2012/6/8	6.31	2023/8/21	-10bp	2024/5/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.50	引き締め: 2022/5/4	4.00	2023/2/8	+25bp	2024/4/5	現状維持
インドネシア	BI金利	6.25	引き締め: 2022/8/23	3.50	2024/4/24	+25bp	2024/5/22	現状維持
韓国	7日物レポ金利	3.50	引き締め: 2021/8/26	0.50	2023/1/13	+25bp	2024/5/23	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	引き締め: 2022/5/11	1.75	2023/5/3	+25bp	2024/5/9	現状維持
フィリピン	翌日物金利	6.50	引き締め: 2022/5/19	2.00	2023/10/26	+25bp	2024/5/16	現状維持
台湾	再割引金利(公定歩合)	2.000	引き締め: 2022/3/17	1.125	2024/3/21	+12.5bp	2024/3/21	+12.5bp
タイ	翌日物レポ金利	2.50	引き締め: 2022/8/10	0.50	2023/9/27	+25bp	2024/4/10	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	5.00	緩和: 2023/3/31	6.00	2023/5/23	-50bp	2023/5/23	-50bp

(注) インドネシア中銀は2023年12月21日に政策金利を7日物リバースレポレートからBI金利に変更